

第三 聖書

第三の聖書

12巻からなる啓示書に基づく、神聖な啓示の
要約

「真の命の書」

出版情報

著作権 UrhG第2条に基づき：

年： 2026

ISBN： 9789403943060

表紙デザイン：

Bookmundoの表紙デザイナー

出版社ポータル：

Bookmundo

Delftsestraat 33

NL – 3013AE ロッテルダム

オランダ

info@bookmundo.com

ドイツで印刷

CPI Books GmbH

ドイツ国立図書館（DNB）は、本書をドイツ国立書誌に収録します
（DNBには2部の寄贈本が送付されます）

本書およびそのすべての部分は、著作権法（UrhG）第2条に基づき、著作権保護の対象となります。著者の同意なしに、本著作物の内容を変更してはならない。

出典

全12巻からなる著作『Libro de la Vida Verdadera』（真の生命の書）は、全人類に向けた遺産であり、

メキシコの「Dirección General del Derecho de Autor de la Secretaría de Educación Pública」に、番号26002、20111、83848として登録されています。

スペイン語の初版に関する詳細情報：

Asociación de Estudios Espirituales Vida Verdadera, A.C.
Apartado Postal 888, México, D.F., - C.P. 06000

ドイツ語訳、ドイツ語版の序文、解説、脚注、注釈、および本書に関連する引用については、以下の者が責任を負う：

ヴァルター・マイヤーおよびトラウゴット・ゲルテンボス。

状態： 2017年1月

編集（新しい正書法および組版）：

Buchdienst zum Leben

マンフレート・ベーゼ*

*（故人）

Kirchweg 5

D-88521 エルティンゲン

電話：+49 (0) 7371 929 66 42

Eメール：manfredbaese@gmx.de

本版に関する情報：

『第三の遺言』は、イエス・キリストの指示に従い、翻訳のために内容を変更することなくこの形式で執筆され、その後、DeepL翻訳ソフトを用いてこれまでに35の言語に翻訳されています。

これらは、ウォルター・マイヤーとトラウゴット・ゲルテンボスが翻訳し、ライヒル・ヴェルラグ社から出版されたオリジナルのテキストです。これらは本来の純粋な状態で保存されなければならない、良心に基づいて正当な理由がない限り、その内容を変更してはなりません。

主のアンナ・マリア・ホスタへの御言葉。ホスタの意味：ホス－姓-t-聖餐のパン-A-アンナ－2017年にキリストからその名を与えられた

2017年3月25日

イエスは彼女にこう言われる：「封印の時代」.....そして次のように続けられる：

「これを活用しなさい。今日、私はあなたを選び、私の教えを受け入れ、それを人々に伝えていくようにした。」

「あなたはまだ、私のメッセージを全世界に広める方法を学ばなければならない。」

「これらの書物には著作権を適用することはできない。なぜなら、それらはすべての人々のために用意されているからだ。」

出典となるドイツ語版、およびそれをもとに作成されたすべての翻訳については、主イエス・キリスト、私たちの神、ならびにこれらの著作の著者であり所有者である方の授權により、アンナ・マリア・ホスタが責任を負っています。

本名：

アンナ・エリザベス・ホス

居住地：フライブルク・イム・ブライスガウ

(Eメール：hoanna64@yahoo.com)

<https://www.anna-maria-hosta.de>

DeepL－ダウンロードリンク：www.DeepL.com/Translator

イエス・キリストの言葉

...「私は、私があなた方に与えたこの言葉によって、私の預言が成就するよう、書物を編纂し、後にその抜粋と解釈を作成し、それをあなた方の同胞に知らせることを望む。」（6, 52 *）

** 小数点前の数字は教えの番号を指し、小数点後の数字は『真の命の書』全12巻における節番号を指す。*

...「人類がやがて『第三の聖書』として認めることになるこの書物をもって、あなたがたは私の大義を擁護しなければならない。人類は『最初の時代』の律法と、第一および第二の聖書に記されていることしか知らない。しかし、第三の聖書は今、人々が備えと理解の欠如から変えてしまったものを統合し、正すことになる。」（348, 26）

...「あなた方を呼びかけるこの声は、神聖なる師の声である。この言葉は、万物を創造された方によるものである。この著作の真髄は、将来、あらゆる秩序が築かれる礎となるだろう。万事をなす力を持つ方は、あなた方の石のような心を、愛と高揚の聖域へと変え、かつて闇しかなかった場所に光を灯すであろう。」（50, 2）

読者への注記：

人間は肉体以上の存在である。人間は、地上の肉体の中に宿る霊的な存在である。この霊的な存在は、霊と魂から成っている。霊は魂を通じて肉体を導く。

口語では、「精神」と「魂」はしばしば同義語として用いられる。これは特に、カトリック教会の定説によるものである。

翻訳の基礎となったスペイン語の文献では、両概念が共に言及され、その相互関係が明らかにされている箇所を除き、両概念とも「espíritu」と表記されている。

そのような場合、区別を明確にするために、「精神」はスペイン語で「良心」や「意識」を意味する「conciencia」を用いて表現されている。

ドイツ語訳において「espíritu」を単一の用語で統一して翻訳すると不明確さをもたらすため、翻訳者たちは最善の知識と良心に基づき、上記の説明に従って「espíritu」をそれぞれ「Geist（霊）」、あるいは「Seele（魂）」、あるいは「Geistseele（霊魂）」と翻訳するよう努めました。

読者の皆様には、疑わしい点がある場合は、啓示のテキストをその文脈に沿って理解していただくようお願いいたします。

序文

本書は、1956年から1962年にかけてメキシコで『Libro de la Vida Verdadera』というタイトルで刊行された、神の啓示を収録した12巻の叢書から、要約・抜粋した文章を収録したものです。これらの啓示や教えの中で、神は創造主、審判者、そして父として、またキリストは神の「御言葉」として、そして聖霊との一致の中で神から遣わされた神聖な知恵の師として、自らを明らかにされました。

膨大な量の教えのテキストの中から、テーマ別に整理された抜粋版にとって、内容的にも言語的にも最も適しており、かつ各テーマを可能な限り包括的に提示する上で不可欠な箇所を見つけ出し、選定することは容易な作業ではありませんでした。また、原典の特定の節にある特定の主張を伝えるために、その趣旨に関連する複数の節をドイツ語の要約版に含める必要が生じることもありました。他の箇所では、より長い原典の節のうち、異なる主題を含む部分のみを採録する必要が生じました。

『クンド』のスペイン語原典をドイツ語に翻訳するにあたっては、その意味内容を正確に再現することを最優先の原則とした。なぜなら、それが神の言葉の本質を表しているからである。可能な限り、スペイン語の文言も可能な限り忠実に再現したため、これらのテキストには時折、少々独特で馴染みのない単語、概念、表現が登場することがある。そのため、より詳しい説明のために脚注が必要となる場合もありました。しかし、基本的には、読みやすく理解しやすいドイツ語の表現を重視しました。したがって、直訳が言語的に不自然であり、かつ当該箇所の意味内容が損なわれることなく、適切なドイツ語で表現できる場合には、直訳を控えることがしばしばありました。

啓示の伝達者たちは恍惚状態にあるため、啓示の定型化に意識的に関与したわけではなく、単に、神の啓示のための道具として、各自の多かれ少なかれ発達した言語能力や概念形成能力を提供したに過ぎず、また、啓示の言葉の力強さは彼らの通常の表現能力をはるかに超えていたにも

かわらず、啓示の言語的明瞭さと表現力は、各伝達者の精神的・霊的な準備や語彙力にも依存していたのである。

「霊」と「魂」という概念に関して、意味的に正しい翻訳を行うことは特別な問題となった。なぜなら、スペイン語版では「魂」を表す「alma」や「anima」という語が全く見当たらず、その代わりに「霊」を表す「espíritu」という語が用いられているからである。したがって、場合によっては、「エスピリトゥ」を本来の意味である「霊」として翻訳すべきか、あるいは「魂」として翻訳すべきかという判断が非常に難しく、最善の知識と良心に基づいて決定せざるを得なかった。こうした言葉の混同が生じた理由は、神の啓示そのものにあるのではなく、言葉を伝えた人々の言語習慣、および後にメキシコで行われた『真の命の書』の編集と初版出版における誤った判断によるものでした。

本書は、テーマ別に構成された要約集であり、関心のある読者や、知恵と真理を求めるすべての人々が、1950年末以前、すなわち1884年から1950年にかけて、人類への新たなメッセージと教えとして啓示されたものを包括的に概観する一助となることを目的としています。とりわけ、この書は、御霊の教え、すなわち新しい神の言葉に対する徹底的な研究と理解を深めることを容易にし、促進することを使命としています。

テーマが明快に構成されているため、目次を参照することで、読者が現在関心を持っているテーマや箇所、あるいは異論を持つ人々との議論や、霊の兄弟姉妹との話し合いに必要な箇所を素早く見つけることができます。

この形式とこのタイトルで本要覧を作成するという使命と正当性は、キリストご自身がその新しい御言葉の中で与えられたものです。各章はそれぞれ一つのテーマを扱っており（第61章から第63章を除く）、前の章の内容を知らなくても、そのテーマに特に興味のある方であれば理解できます。とはいえ、霊の教えを完全に把握するためには、本書を最初から最後まで体系的に学ぶことが推奨され、また必要不可欠です。

日々の霊的励ましや指針としては、特に第9～11章、第16～18章、第20～22章、第32～36章、第43～45章、第59～61章、第63章、および第65章が適しています。なお、ドイツ語訳版『真のいのちの書』『Libro de la Vida Verdadera』のドイツ語訳版に収録された完全な教えにも特に注目すべきです。これらはから書店を通じて入手可能です。関心のある読者や

信者は、これらを通じて神の啓示が全体としてどのように行われたかについての印象を得ることができ、それらを読むことで、この『第三の聖書』と同様に、精神と心に深い喜びと啓発を体験することができるでしょう。善意あるすべての人々に、これがもたらされることを願います。

編集者

序文

どの宗派や信仰団体に属していようと、ほとんどのキリスト教徒は、本書のタイトル『第三の聖書』を傲慢なものと受け止めるでしょう。なぜなら、この新たな啓示の著作は、彼らにとって既知の聖書の旧約聖書および新約聖書と同列に置かれることになるからです。聖書は聖典であり、彼らの信仰の基礎として完結しており、それ以上の続編や拡張を必要としないものと見なされているからです。

しかし、真の聖書通であれば、この伝統的な見解が、新約聖書の福音書に伝えられているイエスの決定的な教えには根拠がないことを知っているはずだ。それどころか！イエスは、別れの説教の中で、再臨について繰り返し語られ、それに関連して、「真理の御霊」、「慰めの御霊」、「聖霊」について言及し、その御霊がやがて「すべての真理に導いてくださる」と述べられました。

使徒パウロは、時の満ちる時に訪れる神の偉大な啓示に対する確信を、次のように表現しています。「今は、鏡に映るように、ぼんやりとしか見ることはできませんが、その時には、私が知られているのと同じように、私も知るようになるのです。」（コリントの信徒への手紙一 13章12節）

この序文は、信仰を持つクリスチャン、ひいては本書に関心を持つすべての読者に、本書の成立に関する真実の知識を伝え、また、イエスの再臨に関する約束がどのような方法と外的状況の下で成就したかを明らかにすることを目的としています。なぜなら、啓示そのものに含まれる記述にもかかわらず、いくつかの疑問が残り、疑念や誤った認識を生む恐れがあるからです。また、この序文は、神の御霊が、人類への「第三の聖書」として新たな啓示の中で残されたものを理解しやすくするものでもある。

この新しい神の御言葉を自ら読む読者の誰もが確認できるように、そこには最高の権威、知恵、そして愛が輝いている。これは、イエスが「雲に乗って」（ルカ21:27）再臨するという約束の成就であり、御霊の言葉で象徴的に表現すれば、それは「霊的な方法」による再臨を意味する。したがって、メキシコにおける神の啓示を主題別に体系化したこの

神の第三の聖書は、「霊において」のキリストの再臨に関する真実の証であり、人類に向けた、現代に即したメッセージと教えを凝縮した形である。

この言葉は、現代の人々にとって霊的な指針となり、神、自分自身、地上での存在の意味、そして個人の人生で起こる出来事、さらには「聖霊の時代」の到来に必然的に伴う出来事や変化について、より良く、より深く理解する助けとなるものである。中世の修道院長ヨアキム・ディ・フィオーレや、彼に続く多くの者たちが、すでにこの時代について語っていた。それは、預言者の時代以来、人類に約束されてきた、地上に到来するキリストの平和の王国である。

言葉によるキリストの霊的な再臨をもって、この霊の時代、すなわち人間の霊化の時代はすでに到来しており、キリストはその新しい愛の言葉をもって、そこへの道を指し示されたのである。

キリストの再臨における中心的な出来事は、キリスト教世界のあらゆる予想に反して、未来のことではなく、すでに歴史となっている。それは1866年から1950年にかけて、世間の「大いなる世界」やキリスト教世界からは気づかれず、無視されたまま、ひっそりと進行したのである！ 西洋キリスト教の中心地であるローマでも、正教の信仰の中心地であるアトス山でも、あるいは多くの人が予想したように、ユダヤ・キリスト教の古都エルサレムでも、あるいはプロテスタント神学や宗教哲学の周辺でもなく、いわゆる第三世界の国、メキシコにおいてであった！ しかも、そこでも権力と華やかさを誇る支配的なカトリック教会の中ではなく、メキシコシティの郊外や周辺地域に住む、素朴で教育を受けていない人々の間という、貧困と無名さの中にあり、そこから国中に広がっていったのです。誰がそんなことを予想したのでしょうか？

キリストの再臨は、新たに設立されたカリスマ的なキリスト教スピリチュアリズムの教会や兄弟団において、キリストに選ばれた人々が恍惚状態の中で霊的に受けた啓示という形で現実のものとなった。

これらの啓示の大部分は、1950年以前の数年間、速記によって記録され、書き起こされ、後に『Libro de la Vida Verdadera』（ドイツ語訳：『真の生命の書』）と題された12巻の叢書として出版された。ここ数年、過去の教えのすべてが、より拡充され、深められた形で繰り返されてきました。本書は、この著作に収録されているあらゆるテーマについて、その中から厳選された文章を収録したものです。

キリストによるこれらの教えの集大成、およびテーマ別に整理された抜粋は、当初から主によって、人類、とりわけキリスト教徒のための「第三の聖書」として意図されていたものである。この重大な声明の真実性は、本序文を通じて読者に明らかにされるであろう。

主の御言葉によれば、キリストの再臨の地としてメキシコが選ばれた理由は、現在の住民の先住民であるインディアンたちが、主の名においてスペインの征服者たちによって拷問を受け、強制的に「キリスト教化」されたことにある。また、何世紀にもわたる抑圧と隷属を通じて、これらの民族とその現代の子孫は、地球上の他の民族、とりわけヨーロッパの民族よりも、兄弟愛の精神、人間愛、心の謙虚さ、そして寛容さを育んできた。それゆえ、かつて選ばれた「イスラエルの民」の中から、多くの成熟した魂が現代においてメキシコの人々の中に生まれ、そして「霊的なイスラエル」に与えられた約束の成就を目撃したのである。

また、イエスの誕生、すなわちキリストのこの世への最初の到来は、ローマやギリシャといった権力と文明の中心地でも、ユダヤ文化の中心地であるエルサレムでさえもではなく、人里離れた貧しい環境の中で起こった。そして、イエスの故郷であり、その活動の主な舞台となったのは、エルサレムのユダヤ人たちから軽蔑されていたガリラヤであった。これに対し、かつての律法学者たちは、優越感に浸りながらこう言った。「ナザレから、いったい何が良いものが出てくるというのか?」。今日の神学者たちは、同じ過ちや誤りを犯してはならない。知的な優越感から、密かにこう考えてはならないのだ。「メキシコから、いったい何が良きもの、偉大なものが生まれるというのか?」と。

そこでの霊的な啓示が、本当に神聖な起源を持つものであると示す根拠は何だろうか。何よりもまず、その啓示そのものが、紛れもなくキリストの精神と心、そして天の父の愛と慈悲に満ちていることである。これに触れて心を動かされない人間の心があるのか。また、その思想、啓示、戒め、教えの知恵と深遠さは、その発端者について雄弁な証しを立てている。どのような欺瞞の霊が、悪意を持ってこれらすべてを偽装し得るというのか?これらの教えは人類の改善、発展、高揚にのみ役立つものである以上、その悪意とは一体何に存するというのか?

これらの啓示が神の新しい御言葉として本物であることを示すさらなる根拠として、これらがこれほど長い期間にわたり、これほど多くの異なる伝達者や啓示の場所を通じて行われてきたにもかかわらず、その

精神と性格において統一された特徴を持ち、明らかに単一の啓示源を指し示しているという事実が挙げられる。一体どのような闇の力が、神を嘲笑するかのように、国全体において何十年にもわたり、このようなことを魅惑的な幻術として仕組むことができるのでしょうか？それは単に不可能なことであり、人類の子らを受する父であり、地上の運命を司る最高指導者である神が、決して許すことのないことです。

これらの啓示が、御言葉におけるキリストの霊的な再臨の証しとして真実であることを示す、さらなる重大な根拠は、キリストの再臨とその「しるし」に関するイエスの約束と、二つの世界大戦という世界を揺るがし変革をもたらした出来事が起こった期間中のメキシコでの出来事との一致にある。これについては、『真のいのちの書』第1巻の序文「聖書の約束に映るキリストの再臨」およびエルネスト・エンケルリンによる研究『神の御霊の働き』（いずれもライヒル出版社刊）を参照されたい。

19世紀、いわゆる「神の書記」ヤコブ・ローバーによって、キリスト教界に対し、この世界地域、ひいてはメキシコがキリストの霊的再臨の地であるという重要な証言がなされた。イエスは、その偉大な新啓示の著作の一節において、ご自身の霊的な再臨が、大洋、すなわち大西洋の向こう側の国で起こるであろうと語っています（『ヨハネによる福音書』94章14-15節）。ローバーによる啓示を信じる者たちや、霊的に目覚めたすべてのキリスト教徒にとって、これは、この預言がすでに成就したのではないかと自問し、アメリカ大陸のどの国で、この主張を掲げ、かつそれにふさわしい出来事が起こったのかを探求するきっかけとなるべきではないだろうか。しかし、その判断基準は、啓示された創造に関する知識の大きさだけでなく、何よりもそこに表れている神の愛と知恵であるべきです。

そのような出来事は実際に起こっており、19世紀の60年代初頭、メキシコで始まった。当時、1861年6月23日、ロケ・ロハスという名の庶民の男が、大天使ガブリエルによる最初の召命体験と、主の地上における先駆者としての使命が告げられる幻視を受けたのである。＊その後、さらなる大きな幻視によって神からの召命の真実性を確信した彼は、恍惚状態の中で授かったメッセージや幻視について人々に語り始め、その説得力と信頼性によって、次第に信者たちの共同体を形成していきました。その後、霊的癒しの賜物が現れるにつれ、彼は広く知られるようになり、助けや助言を求めるすべての人々から高く評価されるようになりました。彼は最初の集会所を設立し、1866年9月1日、そこで初めてエリア

スが彼を通して語りかけ、7人の男女が新たに設立される教会の指導者として按手された。彼らは、救いの歴史における各時代を象徴する「七つの封印」を表していた。

* これに関するより詳細な情報は、『第三の時代』（ライヒル出版社）の序文を参照のこと。

1869年の聖週間に行われた集会の参加者たちが、ロケ・ロハスが期待していたような畏敬の念や敬虔さを示さなかったため、彼は聖なる怒りに駆られ、それまでエリアスを通じて受け取っていた神の啓示を破棄した。彼はその集会所を閉鎖すると宣言し、それによって自身の祝福に満ちた働きに早すぎる終止符を打った。しかし、彼が蒔いた良き種は他の場所で発芽し、花開いた。そして数年後の1884年、七つの封印の教会のひとつにおいて、その教会の宣教に忠実であり続けたある女性を通じて、初めてキリストご自身が語られた。それ以来、神の啓示は世代を超えて途切れることなく続き、1950年の終わりまで続いた。

この期間、教会と信徒の数はますます増え続け、キリストが「御自身の霊の働き」と呼んだこのキリスト教スピリチュアリズム運動は、最終的には全国に数百の教会と数千人の信徒を擁するに至った。

信者たちは毎週日曜日の午前中、質素な教会の集会室や個人の家などに集まり、一人または複数の伝達者がいる場所ではどこでも、聴衆の必要や理解力に応じて、神の御霊が同時に現れていました。

週に一度、癒しの礼拝が行われ、そこでは神の霊界が、教え、助言し、癒すという形で霊的に現れました。肉体と魂に対する多くの霊的癒やしがありましたが、残念ながら、それらは文書に記録されず、後世に伝えられることはありませんでした。人々はそれらを、特に驚くべきことでも、後世に伝える価値のあることでもないと思なしていたようです。

主がはるか以前から予告し、1950年の年末に と定められた神の啓示および神の霊界からの啓示の終了に伴い、霊の働きの中に深い断絶が生じました。それは、キリストのこの命令に従い、それ以上の霊的啓示を控えた教会と、一方、この命令に従わず、その代弁者たちをトランス状態に陥らせ、それによって低次の霊界や欺瞞の霊たちに門戸を開き、偽りのキリストや霊の啓示を受け入れるようになった教会や教会指導者たちとの間に生じた分裂である。

残念ながら、これらの不従順な教会は、忠実であり続けた教会よりも一般大衆にとってはるかに大きな魅力を持っていました。忠実な教会の信徒の多くは、小さなグループに分かれて散り散りになったり、あるいは反対陣営へと移ったりしました。なぜなら、教義の一節を読み上げ、その後それについて意見交換を行うという静かな礼拝よりも、そちらの方が人間の娯楽や刺激を求める欲求に対してより多くの「提供」があったからです。

こうした不利な状況にもかかわらず、1950年以降、主に元伝道者たちからなる男女のグループが、全国各地に散らばった啓示を集め、それらを書籍として出版し、人類に広める作業を開始した。その際、彼らは主にタイプライターで打たれた原稿の写しに依拠せざるを得なかった。それらは、当時の集会の速記記録に基づき、書記たち自身によって作成され、その後、要望に応じて写しとして配布されていたものである。こうして、多種多様な啓示の原稿が多数集められ、そのうち最終的に366点が『Libro de la Vida Verdadera』（日本語訳：『真の生命の書』）の叢書に収録されるために選ばれました。

これらは、とりわけ1950年以前の最後の数年間のものを中心に、すべての啓示の一部に過ぎないとはいえ（これは、元伝道者の遺品から最近「発見」された、未発表と思われる啓示原稿の大量の束によっても証明されている）、この膨大な数の啓示に鑑みれば、それらを全体として見れば、神の霊が人類に伝え、より光に満ちた未来への道を見出せるよう啓発しようとしたすべての主題と教義が含まれていると見なすことができる。

1962年、ドイツにおいて、この全集の最初のドイツ語選集が『第三の時代（Die Dritte Zeit）』というタイトルで出版され、これにより、ドイツ語圏の限られた人々にも、主の啓示の言葉が初めて知られることとなりました。1979年以降、ライヒル出版社（Reichl Verlag）は『真の生命の書（BUCH DES WAHREN LEBENS）』のドイツ語版を刊行しており、にて、書店を通じて入手可能です。

その後、1970年代にメキシコシティで「精神研究協会」が設立され、啓示原稿の管理と保存、および全集の新版や関連文献の出版をその任務としました。同協会は今日においても、これを自らの本来の使命と捉えています。良心の光のもとでの個人の自己責任を基礎とする宗教運動の中央指導を行うことには、その使命を見出していません。

本書のどのページを開いても、私たちは、キリストがご自身の準備された人間の器——その中には世俗的な学校教育をほとんど受けておらず、口から出る言葉そのものを十分に理解できていなかった人々もいた——を通じて語られた、説得力に満ち、賢明で、愛に満ちた言葉と啓示を、靈的に読み、体験するのです。ましてや、その内容や知恵、そしてそこに表れている神聖な權威など、彼らには到底理解し得なかったことでしょう。

この新しい神の言葉は、一方で、旧約時代のイスラエルの民における出来事や啓示、そしてイエスの地上での生涯と働きに関する確認と解説を含んでいる一方で、他方では、従来のキリスト教的世界観に対して、部分的には抜本的な修正をもたらすような、新たな靈的知見の豊かさをもたらしている。これは、神の像、イエスとマリアの神性、内に神の火花を宿し魂が永遠に発展する人間の本質、天国と地獄、最後の審判、贖罪の教えと罪の赦し、死からの復活、そして永遠の命に関する概念に関わるものである。また、キリスト教信仰の実践や礼拝の形式に関しても、新たな基準や目標が設定され、慣れ親しんだものが疑問視されたり、あるいは廃棄されたりしており、これはとりわけ礼拝の儀式や聖堂建築に顕著に見られる。

その中心的なメッセージは、イエスが伝えたものと同じです。すなわち、外見的な宗教的实践や見せかけの敬虔さではなく、内面的な祈りの生活と、自らの良心に従った個人の行動。利己的な動機による計算高い慈善行為の代わりに——神、人、そして神の創造物である自然への愛に基づく、自発的で無私の行動。ここで「愛」は、配慮、思いやり、敬意、同情、愛情、慰め、助け、支援など、多くの表現形態を持ち得る。安易で盲目的な信仰の代わりに——認識と靈的な知恵に基づく、生き生きとした、見通しの利く信仰。

主はその啓示において、まず、そこにいた信者たちに向けて言葉を述べられた。主は彼らをしばしば「(わたしの)民」、「弟子たち」、あるいは「働き人」と呼び、時には「(愛する)イスラエル」とも呼びかけられた。しかし、より広い意味において、例外はあるものの、主の言葉は、全世界の靈的なイスラエル全体、全世界の神の民全体、そしてあらゆる民族、人種、宗教の人々に向けられている。しかし、彼らはこの新しい神の言葉を喜んで受け入れ、認めるだろうか？

これは、新たな宗教共同体、教会、あるいは宗派を設立する口実となってはならず、またそうあってはならない。これは、人間、そして人

間のあらゆる社会的・宗教的制度の刷新と霊化に向けた神の呼びかけである。人類のためのこの『第三の聖書』を拒む者は、神ご自身と、そこに現れている聖霊をも拒むことになる。神の新しい愛のメッセージそのものに含まれるこの警告の言葉を、誰もがよく熟考し心に留めるべきである。同様に、イエスの「賢い乙女と愚かな乙女」（マタイ25:1-13）や「王の婚礼」（マタイ22:2-14）のたとえ話に含まれる警告もまた、心に留めるべきである。なぜなら、この言葉は、消えかかっている御霊の灯火のための聖なる油であり、主の食卓のパンとぶどう酒であり、魂の永遠の糧であり、慰めだからである。

目次

目次

序文.....	10
序文.....	13
目次.....	21
『第三の聖書』	38
I. キリストの再臨 — 第三の啓示の時代.....	38
第1章 - キリストの再臨を待ち望んで.....	38
救いの出来事に関する序論的概観（ ）	38
希望と期待	39
聖書の約束	42
成就した前兆	44
第2章 - 第三の時代の夜明け.....	45
最初の啓示	45
世界中のメッセージと示唆	47
主の先駆者としてのエリヤの働き	49
第3章 - キリストの再臨という霊的な太陽.....	53
主の到来	53
すべての目がわたしを見るだろう	55
第4章 - 神の啓示による教え	58
啓示の源	58
啓示の場所と啓示の受け手	59
神の啓示の伝達	63
啓示の形式	68
啓示の時間的制限	69
第5章 - 新たな神の啓示の理由.....	70
神の救いの意志	70
	21

誤りや形式化された礼拝の排除	72
真の命についての啓示	75
人間の進化、霊化、そして救済	78
第6章 - 第三の聖書と生命の大いなる書	79
神の愛、真理、そして知恵の書	79
第7章 - 霊の教えの影響と意義	86
啓示の効果	86
新しい御言葉からの気づきと希望	88
第8章 - キリストの新しい教会、弟子たち、使徒たち、そして神の使者たち	95
啓示の教会における光と影	95
真の弟子、新たな使徒たち	100
世界中の、そしてあらゆる時代の神の使徒たち	102
II. 第一および第二の啓示の時代の回顧	106
第9章 - イスラエルの民の物語と人物たち	106
原罪の物語	106
自由意志と原罪	107
大洪水	108
アブラハムの犠牲の精神	109
ヤコブの天の梯子の夢のイメージ	110
ヨセフとその兄弟たち	111
モーセに導かれたイスラエルの民の荒野の旅	111
真の神のためのエリヤの戦い	112
イスラエルの十二部族	113
イスラエルの預言者たちと最初の王たち	114
第10章——時が満ちて	114
預言的な予言	115
ユダヤ民族におけるメシアの期待	115

イエスの生みの母マリア	116
幼子イエスへの礼拝	117
イエスとマリアの愛の絆	117
イエスの知識と知恵	117
ナザレにおける人間社会の無理解	119
第11章 - 地上のイエスの働き	119
ヨルダン川での洗礼；荒野での準備期間	119
イエスと神との一体性	120
待望のメシアとしてのイエスの不承認	121
庶民の中に現れた救い主イエス	122
たゆまぬ説教者イエス	122
イエスの子供たちと自然への愛	123
イエスの教え	124
イエスの「奇跡」	125
姦通の女	127
マグダラのマリア	128
ニコデモと輪廻転生の問題	129
イエスの変容	129
信仰を告白する勇気の欠如	130
イエスに対する敵意	130
別れの予告	131
エルサレムへの入城	132
最後の晩餐	133
第12章 - 受難、死、そして復活	135
イエスの生涯にわたる苦難と苦しみ	135
ユダの裏切り	136
イエスの受難	136

来世におけるイエスの贖いの業	142
復活後のイエスの出現	144
第13章 - イエスとその使徒たちの使命と意義	146
古い神像とその伝統の是正	146
イエスの模範	147
イエスの教えの意義	148
イエスの弟子たちの召命、修業期間、そして試練	148
使徒ヨハネ	149
使徒ペトロとパウロ	151
使徒たちの模範性	152
キリスト教の広がり	153
III. 教会キリスト教の時代	154
第14章 - キリスト教、教会、そして礼拝	154
キリスト教の発展	154
礼拝の儀式	155
聖職者たち	156
聖餐とミサ	158
洗礼	159
死者の追悼	161
物質的な象徴、十字架、聖遺物	162
聖人崇拝	163
教会の祝祭日	164
誤った礼拝形態にもかかわらず、神は常に共におられる	166
第15章——偽りのキリスト者、教会の誤った教えと不正	167
名ばかりのキリスト教徒	167
不信仰者と信仰の狂信者	169
イエスの教えの歪曲とその結果	170

キリスト教における誤った発展と弊害	173
IV. 律法——神への愛と隣人への愛	175
第16章 - 神の律法	175
神の法の力	175
『霊の業における神の愛の法』	176
神の律法への背きとその結果	178
至高の律法の成就	179
第17章 - 神を崇拝する新しい方法	181
礼拝の形態の発展	181
献身と信仰を伴わない見せかけの祈り	182
真の祈り	184
完全な祈りの四つの側面	186
言葉のない自発的な心の祈り	188
日々の祈り	190
休息の日、すなわち自己省察の日	191
求めよ、そうすれば与えられる	192
執り成しの祝福	194
祈りの必要性	195
祈りの生活がもたらす恵み	196
祈りの力	197
神と隣人への愛、すなわち神への崇拝	199
神と人間との対話	201
第18章 - 慈悲の業と愛の中心的な重要性	204
善行がもたらす後世の祝福	204
真の慈善と偽りの慈善	206
霊的および物質的な愛の活動	207
愛の包括的な意味	209

愛の崇高な力	211
V. 神の啓示の形態と働き	212
第19章 - 神の三位一体	212
神とキリスト、そして聖霊との一体性	212
神の三つの啓示の仕方	214
創造主の霊であり父である神	217
キリスト、愛、そして神の言葉	218
聖霊——神の真理と知恵	220
第20章 - 神の母なる愛、マリア	220
謙遜に生きるマリアの地上での生涯	220
マリアとイエス	221
マリアの処女性	222
女性のためのマリアの模範	223
人々の執り成し手、慰め手、そして共同の救い主としてのマリア	224
マリアの神性	226
マリアの普遍的な輝き	227
第21章 - 神の全能、遍在、そして正義	228
神の力	228
すべての被造物における神の臨在	230
運命の試練	232
神の正義	234
第22章 - 神の愛、慈しみ、そして恵み	237
天の父の愛	237
神の慈しみと助け	239
至高者の謙虚さ	242
神の憐れみと共にある苦しみ	242
神の赦し、恵み、そして憐れみ	243

第23章 - 神の靈感と啓示	245
神の靈感	245
神の啓示を人間の理解に合わせる	247
神の啓示の様々な形態	248
神の啓示の必要性	250
神の啓示の無限性	251
人間における神の臨在の顕現	253
VI. 創造	254
第24章 - 靈的創造と物質的創造	254
靈的存在の創造	254
創造の業における偉大な霊たちの働き	255
神の摂理の思惟	255
靈的存在のための物質世界の創造	255
人間の創造	256
楽園の記憶	257
人間の性質	258
創造主と被造物との一体性	258
第25章 - 自然	259
自然の法則	259
自然における神の臨在	259
自然、神の創造物、そして靈的なもののたとえ	260
神の子らが自然に対して持つ力	261
人間と自然	261
第26章 - 他の世界	264
キリストの普遍的な光	264
世界間の靈的つながり	265
他の世界や生命体との出会い	266

星々の運命	267
第27章 - あの世	268
霊的生活に関する必要な知識	268
「天国」と「地獄」	268
天国の音楽	272
わが父の家には多くの「住まい」がある	273
VII 完全性への成長の道	274
第28章 - 死、死後、そしてあの世での目覚め	274
精神の不死	274
この世を去るための準備	275
あの世への移行	276
「死の眠り」	278
来世での再会	279
自らの良心による霊への裁き	279
取り戻された霊的意識	283
第29章 - 来世における魂の浄化と昇華	285
良心の呵責、悔恨、そして自責	285
均衡の正義	286
神の御国への魂の昇華	288
第30章 - 転生を通じた魂の進化	291
発展の法則	291
「肉の復活」——正しく理解されること	292
魂の異なる発達段階	294
過去の地上での生と自身の進化の段階に関する知識	294
霊的・精神的成長のための必要条件としての愛	295
転生の様々な理由	296
完全性への道	297

生命の普遍的な学校	298
輪廻転生説の説得力	301
魂の転生の道	301
第31章 - 救い、贖い、そして永遠の救い	304
贖いに関する誤った考えの是正	304
「天国」は勝ち取られるべきものである	309
救いへの最も強力な力	311
すべての魂のための救いと贖い	313
神の子らの輝かしい未来	316
VIII. 人間	318
第32章 - 人間の転生、本質、そして使命	318
地上における転生	318
肉体の正しい評価と、霊によるその導き	320
人間における魂、精神、良心の意味と役割	321
人間の中にある神の神殿	325
第33章 - 夫と妻、親と子、結婚と家族	327
男女の関係	327
男性の性質と役割	329
女性、妻、そして母	331
子供と青少年の教育	332
子供たちと乙女たちへの言葉	334
結婚と家族	335
第34章 - 自由意志と良心	338
良心と自由意志の意義	338
自由意志の乱用	341
良心の衝動に従うことの必要性	343
自由意志と良心の葛藤	343

新しい神の言葉による良心の研ぎ澄まし	345
第35章 - 思考、感情、意志の力	346
思考の送受信とその影響	346
感情、願望、あるいは恐怖の力	349
自己克服の欠如	350
<i>IX 神の知恵の教え</i>	350
第36章 - 信仰、真理、そして認識	350
すべてを克服する信仰	350
神の真理の認識	352
霊的かつ神聖なものへの認識	354
霊的認識のための前提条件	355
人間に必要な意識の拡大	355
第37章 - 聖書のテキストの正しい理解	358
聖書の言葉と約束の解釈	358
使徒ヨハネによるイエスの啓示	362
第38章 - 三つの啓示の時代と七つの封印の時代	363
神の啓示の発展的依存性	363
神の三つの遺言	365
第三の時代	368
救いの歴史における七つの時代	369
第39章 - 地上のイスラエルと霊的なイスラエル	373
イスラエルの歴史的使命、その失敗	373
ユダヤ民族の、世俗的な者たちと霊的な者たちへの分裂	374
霊的なイスラエルの民	376
選ばれ、印を刻まれた14万4千人	379
第40章 - 善と悪の力	382
善と悪の起源	382

高慢と謙虚さ	385
善、善意の人	387
悪、悪に堕ちた人間	388
善と悪の戦い	389
誘惑と惑わし	390
道徳的罪悪	391
悪の無力さと儚さ	392
許しの力	393
第41章 - 現世と来世のつながり	393
霊界からの靈感と助け	393
混乱し、悪意に満ちた霊たち	397
人間をめぐる霊たちの戦い	399
神の霊界とのつながり	401
第42章 - 罪と贖罪、試練と苦しみ	404
悔い改めと贖罪の必要性	404
贖罪の法則	405
試練と苦しみの原因	406
試練における信仰、服従、そして謙遜	409
苦しみと痛みの意味	410
第43章 - 病気、癒やし、そして再生	412
病気の起源と意味	412
自らの力で癒やすこと	413
人間の再生	414
第44章 - 神的な意味での生活	415
必要な均衡	415
善き喜びと堕落をもたらす喜び	416
祝福と不幸をもたらす富	417

与えるという法則	419
義務と任務の遂行	420
第45章 - 人生における宿命、意味、そして成就	421
人間の運命における神の摂理と定命	421
人生の学校	424
人間の人生の意味と価値	425
X 物質主義と精神主義	428
第46章 - 誤った道に迷った物質主義的な人間	428
人間の精神の鈍さ、無知、そして傲慢	428
犠牲、努力、責任に対する意欲の欠如	431
人間の魂の苦しみ	433
誤った地上的行動とその結果	435
第47章 - 唯物論と精神論	437
支配的な唯物論の影響	437
スピリチュアリズムの本質	438
誰が正当にスピリチュアリストと名乗ることができるのか?	439
宗教と宗派におけるスピリチュアリズム	440
第48章 - 霊的賜物と霊化	442
人間の霊的能力	442
真の霊性の前提と特徴	446
霊性の恵み深い影響	447
XI 人類	448
第49章 - 宗教と司法	448
唯一の真の宗教や宗派など存在しない	448
宗教の発展に対する敵意	450
宗教と科学の関係	451
地上の司法の厳しさと不公正	453

人間の冷酷な独善性	454
必要悪としての地上の司法	454
第50章 - 教育と科学	455
虚栄と知識への驕り	455
物質主義的な思考の帰結	456
神と霊界による新たな科学的知見への啓示	461
人類の福祉のために働く科学者たちへの称賛	463
第51章 - 権力者、権力の乱用、そして戦争	464
この世の権力と偉大さという儚い幻想	464
人々や民族に対する横暴な権力の行使	465
第二次世界大戦に関する考察	467
戦争の非道さと無意味さ	469
第52章 - 不正と人類の衰退	471
強者による弱者の隷属と搾取	471
人類の墮落	474
未熟な人類の歪んだ世界	476
第12章 人類の裁きと浄化	478
第53章 - 裁きの時が来た	478
人間の蒔いた種の実り	478
審判における人類の浄化	479
裁きにおける神の愛	481
第54章 - 世界観、宗教、教会の戦い	483
地上のキリストの平和の王国到来前の霊的な戦い	483
地上の精神的覇権をめぐる争い	484
霊の教えへの攻撃	485
霊的啓示や霊的治癒の無視や妨害	488
第55章 - 審判における地球と人類の浄化	488

清めの裁きに先立つ、神と自然からの警告の声	488
悪の力と支配は打ち碎かれる	491
終末的な戦争、疫病、災厄、そして破壊	493
自然と自然災害	494
神の愛の正義と憐れみ	497
審判の影響	497
XIII 世界と創造の変容と完成	499
第56章 - キリストの霊的業の勝利と承認	499
神の使徒たちによる霊の教えの普及	499
新しい御言葉の承認をめぐる戦い	499
聖霊の教えの力	500
全世界におけるキリストの再臨の認識	502
第57章 - あらゆる分野における回心と変革	503
新たかつより深い認識	503
神から遣わされた人々による啓蒙	506
人間の変容	507
あらゆる生活領域における変化と激変	510
第58章 - キリストの平和の王国と創造の完成	512
キリストの平和の王国における支配力	512
新しい人間	513
約束の地であり、天国の反映である地球	515
創造の完成	517
回復された創造の調和の賛歌	518
XIV 宣教の使命	520
第59章 - 新しい神の言葉の普及に関する使命	520
書籍の製本、抜粋版、および翻訳に関する指示	520
新しい神の御言葉を知る権利	521

霊の教えの普及に関する指示	522
第60章 - キリストの御霊による働き	524
新しい弟子たちに必要な資質、美德、能力	524
御言葉を伝える際の正しい在り方	529
正しい宣教の方法	531
肉体的・精神的に苦しむ者たちを慰め、癒やす使命	536
世界的な使命への出発の時	538
XV. 戒め、警告、教え	538
第61章 - 主の戒めと警告	539
戒めと使命	539
信仰、希望、愛、謙遜、確信	541
祈り、研鑽、警戒、刷新、そして霊化	543
啓示を受けた教会への警告	545
1950年以降の啓示の継続と偽りの「キリストの啓示」に対する警告	546
悪徳、偽善、墮落	548
誤った悔い改めと誤った期待	550
地上の諸国民と権力者たちへの警告	551
第62章 - メキシコにいる聴衆への言葉	552
メキシコにいる聴衆への言葉	552
第63章 - 教会およびすべてのキリストの弟子たちへの教え	573
キリストの霊の働き	573
霊的なイスラエルとユダヤ民族	584
弟子としての生き方と霊性	587
発展	600
浄化と完成	605
この世とあの世	609
神の啓示	613

人間とその使命	617
悪徳、過ち、迷い	623
人類の浄化と霊化	627
XVI. 預言とたとえ、慰めと約束	629
第64章 - 預言	629
新旧の預言の成就	629
1945年1月10日、第二次世界大戦終結間近における大いなる諸国民への預言	630
戦争と自然災害 - 天のしるし	632
メキシコの教会分裂に関する預言	633
第65章 - たとえ話、慰め、そして約束	634
悪い家政係のたとえ	634
砂漠の横断から大都市へのたとえ	635
王の寛大さを描いた寓話	639
八福と祝福	640
向上への励まし	642
神の呼びかけ	643
現代の人々への呼びかけ :	643
知識人への呼びかけ :	644
労苦し、重荷を負う者たちへの呼びかけ :	644
霊的イスラエルへの呼びかけ :	644
メキシコにおける神の教え 1866-1950	646

『第三の聖書』

1. キリストの再臨 — 第三の啓示の時代

第1章 - キリストの再臨を待ち望んで

救いの出来事に関する序論的概観（ ）

1. 太古の昔、この世には愛が欠けていた。最初的人类は、すべての被造物の源である霊の本質、すなわちその神聖な力を感じ、理解することからは程遠い存在であった。

2. 彼らは神を信じていたが、神に帰していたのは力と正義だけだった。人々は、自然の要素を通じて神の言葉を理解できると信じていた。それゆえ、自然が穏やかで平和であるのを見ると、主は人間の行いに同意しておられると考えた。しかし、自然の力が解き放たれると、彼らはそこに、その形で現れた神の怒りを見出したのだ。

3. 人々の心の中には、怒りと復讐の感情を抱く恐ろしい神というイメージが形成されていた。それゆえ、神を怒らせたとき、彼らは神をなだめることを願って、全焼のいけにえや供物を捧げた。

4. 私はあなたがたに告げる。それらの供え物は、神への愛から生まれたものではなかった。初期の人々が主への貢ぎ物を捧げるように駆り立てたのは、神の正義への恐れ、すなわち罰への恐怖であった。 5. 彼らは神聖な霊を単に「神」と呼んだが、「父」や「師」とは決して呼ばなかった。

6. 神は確かに正義である——しかし、完全なる正義であるということ、何よりも神は父であり、父としてすべての被造物を愛しておられるということを、人々に理解させ始めたのは、先祖たちや初期の預言者たちであった。

7. 人類は一步一步、霊的發展への道をゆっくりと歩み、巡礼の旅を続け、時代から時代へと移り変わり、神がいつの時代もその子らに与えてきた啓示を通じて、神の神秘について少しずつ知っていった。

8. それにもかかわらず、人間は神の愛を完全に理解することはできなかった。なぜなら、人間は神を真に父として愛していなかったし、主が常に自分に向けてお示しになった愛を、心の中で感じ取ることもできなかったからである。

9. 完全なる愛が人間となり、「御言葉」が受肉し、人々が触れ、目に見える肉体をとることが必要であった。そうして初めて、人々は神がどれほど、そしてどのような方法で彼らを愛し

ておられるかを、ついに知ることができたのである。

10. すべての人がイエスの中に父の臨在を認めたわけではない。イエスは、自分を侮辱する者たちに対しても謙虚で、思いやりがあり、愛に満ちておられたのだから、どうして彼らがイエスを認識できようか。彼らは、神を敵に対しては強くて誇り高く、自分を侮辱する者たちに対しては裁きを下し、恐ろしい存在だと考えていたのだ。

11. しかし、その言葉を拒んだ者が多くいたのと同様に、多くの者もまた、心の奥底にまで響き渡るその言葉を信じた。苦しみや不治の病を、ただ一つの愛撫、無限の憐れみの眼差し、希望の言葉だけで癒やすそのあり方、新しい世界、光と正義に満ちた生活の約束であったその教えは、あの神聖な人が父の真理であり、人々が知らず、ゆえに愛することもできなかった御方の神聖な愛であることを理解した多くの人の心から、もはや消し去ることはできなかった。

12. その至高の真理の種は、人類の心に永遠に蒔かれた。キリストは種を蒔く者であり、今もなおその種を育てている。やがて彼はその実を刈り取り、永遠にそれを喜びとするだろう。その時、彼はもはや「私は飢えている」とか「私は渴いている」とは口にしないだろう。なぜなら、ついに彼の子供たちは、彼が初めから彼らを愛してきたよ

うに、彼を愛するようになるからだ。

13. 弟子たちよ、キリストについて語るのは誰か。キリストご自身である。

14. 人類よ、今再びあなたに語りかけるのは、まさに「言葉」である私だ。私を認識せよ。私が現れる姿が地味であるからといって、私の存在を疑ってはならない。私の中に傲慢などあり得ないのだ。

15. かつてこの世で歩んだ私の生涯によって、私を認識しなさい。私が生まれた時や生きた時と同じように、謙虚に死んだことを思い出してください。（296, 4-16）

希望と期待

16. 「第二の時代」における私の去り後、私への信仰を守り続けた者たちの間では、世代から世代へと私の再臨が待ち望まれてきた。親から子へと神の約束は受け継がれ、私の言葉は、私の帰還を目撃したいという切なる願いを生き生きと保ち続けた。

17. どの世代も、自分たちの時代に主の言葉が成就すると期待し、自分たちがその恵みを受ける世代であると信じていた。

18. こうして時は流れ、世代も移り変わり、人々の心からは私の約束がますます押しやられ、人々は目を覚まし、祈ることを忘れてしまった。（356, 4-5）

19. 世界は試練にさらされており、諸国民は、彼らに降りかかる私の正義の重荷を痛感している。そして、あなた方を呼びかける私の光、私の声が、全人類の中に感じられるようになっていく。

20. 人々は私の臨在を感じ、降り注ぎ、彼らの上に留まる私の普遍的な光線を感じ取っている。彼らは、この書物*を知らず、私の言葉を聞いたこともないのに、私を予感し、私に向かって魂を掲げ、こう問いかける。「主よ、私たちはどのような時代に生きているのでしょうか。人々を襲ったこれらの試練と苦しみ——それらは何を意味するのでしょうか、父よ。あなたは、この世の嘆きを聞き取っておられないのですか？あなたは再び来るとおっしゃらなかったのですか？いつおいでになるのですか、おお主よ？」そして、あらゆる信仰団体や宗教共同体において、わが子らの霊は高まり、彼らはわたしを求め、わたしに願い、わたしに問いかけ、わたしを待ち望んでいる。(222, 29)

* 1866年にメキシコで先駆者エリ阿斯を通じて始まった、キリストの再臨における言葉による、霊的な形の啓示。

21. 人々は私に問いかけ、こう言う。「主よ、もしあなたが存在されるのなら、かつては私たちの世界にまで降りてこられたのに、なぜ今、私たちの間には

現れないのですか？なぜ今日、来られないのですか？私たちの不信心は、今やあなたが助けに来るのを妨げるほど大きくなっているのでしょうか？あなたは常に、失われた者、「盲人」、「ハンセン病患者」を探してこられました——今、世界は彼らで溢れています。私たちはもはや、あなたの憐れみを呼び起こさないのでしょうか？

22. あなたは使徒たちに、人々のところに戻るとおっしゃいましたし、来臨のしるしを与えることと約束されました。私たちは今、そのしるしを見ていると信じています。なぜ、私たちに御顔をお見せにならないのですか？」

23. 見よ、人々は、私が彼らの間にいることを感じることなく、私を待ち望んでいる。私は彼らの目の前にいるが、彼らは私を見ない。私は彼らに語りかけるが、彼らは私の声を聞かない。そして、ついに一瞬私を見ても、彼らは私を否定する。しかし、私は引き続き自分自身を証しし、私を望む者たちを、これから待ち続けるであろう。

24. しかし、まことに、この時代のわたしの顕現のしるしは大きかった。人々の血が川のように流され、大地を濡らしたことでさえ、聖霊としてあなたがたの間におけるわたしの時の到来を示していたのである。(62, 27-29)

25. 誰も私の臨在に驚いてはならない。私はすでにイエスを通して、真理の霊としての私の顕現を告げる出来事を、あなたがたに示していた。また、私の到来は霊によってなされるものであると、あなたがたに告げた。それは、決して起こることのない物質的な顕現を、誰も期待しないようにするためである。

26. ユダヤの民を見よ。彼らは今なおメシアを待ち望んでいるが、彼らが期待する形ではメシアは来ない。なぜなら、真のメシアはすでに彼らの間にいたのに、彼らは彼を認識しなかったからである。

27. 人類よ、あなたは私の新しい啓示を認めようとせず、私が約束したことに従うのではなく、あなたの信仰の概念に従って私を待ち続けようとするのか。

(99, 2)

28. 世界は新たなメシアを待ち望んではならない。私が再び来ると約束したように、私の到来は霊的なものであることも、私はあなた方に知らせてきた。しかし、人々は私を迎えるための準備を、決して理解できなかった。

29. 当時、人々は、イエスの中に神が隠されているとは信じようとしなかった。彼らはイエスを、他の誰とも変わらない、ただの一人の人間であり、誰よりも貧しい者だと考えていたからである。それにもかかわらず、人々は後に、キリストの力強い

御業を目の当たりにして、この世に生まれ、成長し、そして死んだあの人の中に、神の「御言葉」があったのだと確信するに至った。しかし、現代においては、多くの人々が、私が第二の時代のように人間として来られるのでなければ、私の到来を認めようとはしないだろう。

30. 私が霊として来られ、そのようにして人類に御自身を現されるという証拠は、証言があるにもかかわらず、すべての人によって認められるわけではない。なぜなら、唯物論は、多くの人々の目の前を覆う暗い覆いとなるからである。

31. どれほど多くの人々が、キリストが再びこの世で苦しみ、奇跡を行われるのを見て、その臨在や存在を信じたいと願っていることか。しかし、まことに、あなたがたに告げる。この地上には、私が人間として生まれるのを見る飼葉桶も、私が死ぬのを見るもう一つのゴルゴタも、もはや存在しない。今や、真の命へと復活する者は皆、心の中で私が生まれるのを感じるだろう。同様に、頑なに罪の中に留まり続ける者もまた、心の中で私が死ぬのを感じるだろう。(88, 27-29)

32. 見よ、この時代、どれほど多くの人々が、過ぎ去った時代の聖書を研究し、預言者たちについて思索し、キリストが再臨についてなされた約束を理解しようと努めていることか。

33. 彼らがこう言うのを聞きなさい。「師は近くにおられる」——「主はすでにおられる」、あるいは「主はまもなく来られる」と。そしてこう付け加える。「主の再臨のしるしは、はっきりと明白である」と。

34. ある者は私を求め、私を呼び求め、ある者は私の臨在を感じ、またある者は霊において私の到来を予感している。

35. ああ、もしすべての人の中に、すでにその知識への渇きがあったなら、もしすべての人の中に、至高の真理を知りたいというその渇望があったなら！
(239, 68-71)

36. あらゆる宗派や分派の人々が、私の到来を告げるしるしを発見しようと、時代や人生、出来事を探り回っている様子を見よ。彼らは無知な者たちであり、私がすでに長い間自らを明らかにしており、まもなくこの種の啓示が終わりを迎えることを知らないのだ。

37. しかし、私はこうも言うておく。私をこれほど切望して待ち望んでいる人々の多くでさえ、私が自らを現す方法（ ）を目の当たりにすれば、私を認識することはなく、むしろきっぱりと拒絶するだろう。

38. 彼らには証言だけが届くであろう。そしてそれによって、彼らは、私が自分の子供たちの間にいたことを、それでもなお信じるようになるだろう。

39. あなた方もまた、心の中で焦燥感を持って私を待ち望んでいた。しかし、私は、あなた方が私を認識し、この時代の私の働き手の一員となることを知っていた。(255, 2-4)

聖書の約束

40. イエスを通した私の啓示において、私は聖霊の到来を告げた。しかし、人々は、聖霊とは、彼らには知られざる神の中に存在する神格であると考えていた。私が聖霊について語ったとき、私が語っていたのは、人間の理解力を超えて人々に自らを現す時を準備していた、唯一の神についてであったことを、彼らは理解できなかったのだ。(8, 4)

41. なぜ、私の新たな啓示に誰かが驚かなければならないのか。まことに、私はあなたがたに言う。古の時代の先祖たちはすでにこの時代の到来を知っており、他の時代の予言者たちはそれを見通し、預言者たちはそれを告げていた。それは、私がイエスとしてこの世に生まれるずっと以前に、人々に与えられていた神の約束であった。

42. 私が弟子たちに再臨を告げ、人々にどのように現れるかを伝えた時、その約束があなた方に与えられてから、すでに長い時が過ぎていた。

43. 今、あなたがたはあの時代の経過を目の当たりにしている。ここで、あの預言が成就して

いるのだ。誰がこれに驚くだろうか。ただ、闇*の中で眠っていた者たち、あるいは私の約束を自らの内から消し去ってしまった者たちだけである。(12, 97-99)

* ここや他の箇所における「闇」という言葉は、「無知」、「無明」を意味し、対照的に「光」は「認識」、「悟り」の象徴として用いられている。

44. あなたがたがわたしの教えに深く入り込むことはほとんどないだろうと知っていたし、また、わたしの啓示を解釈する際にあなたがたが陥るであろう誤りを予見していたので、わたしはあなたがたに、真理の霊を送り、多くの秘密を解き明かし、あなたがたが理解できなかったことを説明してもらおうと告げ、わたしの再臨を予告した。

45. なぜなら、わたしの預言の言葉の核心において、わたしはあなたがたにこう告げたのである。すなわち、この時代において、わたしはシナイ山で雷鳴と稲妻を伴って現れるようなことはせず、また「第二の時代」のように人間となり、わたしの愛と言葉を 人間的なものにすることもない、むしろ、私は知恵の光線に乗ってあなたがたの霊に近づき、靈感の光であなたがたの理性を驚かせ、あなたがたの心が理解できる声で、あなたがたの心の扉を叩くのだと告げたのである。それらの予言と約束

は、まさに今、成就しつつある。

46. あなたがたが私の光を見、私の霊の臨在を感じるために必要なのは、ほんの少しの準備をすることだけである。その霊こそ、教え、真理を明らかにするために来ることをあなたがたに告げていた者である。(108, 22-23)

47. 恐れや勤勉さの欠如から成長せず、メシアの到来を認めずにモーセの律法に従うだけの者たちが多くいる。また、イエスを信じながらも、約束された慰め主の霊を待ち望んでいなかった者たちもいる。今、私は三度目に降りてきたが、彼らは私を待ち望んでいなかった。

48. 天使たちはこれらの啓示を告げ、その呼び声は空間を満たした。あなたがたはそれを認識したか。私の臨在を証しするために、霊界があなたがたのところに來たのだ。書かれていることはすべて成就する。引き起こされた破壊は、人間の傲慢と虚栄を打ち砕き、人間は謙虚になり、わたしを求め、わたしを父と呼ぶようになる。(179, 38-39)

49. かつて、私はあなた方にこう語った。「私があなた方に語ったことは、私が教えなければならないことのすべてではない。あなたがたがすべてを知るためには、まず私が去り、真理の霊をあなた方に送らなければならない。そうして、私が語った

こと、行ったことすべてを、その霊が説明してくれるのだ。試練の時、私はあなた方に慰め主を約束する。」しかし、その慰め主、その説明者とは、あなたがたを啓発し、過去の教えと、今私があなたがたにもたらすこの新しい教えを理解できるよう助けるために戻ってくる、私その人である。(339, 26)

50. 知恵の中には、あなたがたの心が切望する癒しの香油と慰めがある。それゆえ、私はかつて、慰めの御霊として真理の御霊をあなたがたに約束した。しかし、試練に直面しても立ち止まったり恐れを感じたりしないためには、信仰を持つことが不可欠である。(263, 10-11)

成就した前兆

51. 新しい時代が到来し、私が今、霊的に人類に現れているという兆しを認識している人は、ごくわずかである。大多数の人々は、その人生と努力を物質的な進歩に捧げ、そして、その目標を達成するための無慈悲で、時に血なまぐさい闘争の中で、彼らは盲人のように生き、方向を見失い、何を求めているのか分からなくなり、新しい夜明けの明るい輝きを見ることができず、前兆に気づかず、私の啓示の知識を身につけることから程遠い。

52. この人類は、私が時代を超えて与えてきた啓示よりも、人間の教えや言葉をより信じてき

た。父が、その正義をもって、あなたがたが至る所で目にするものよりもさらに大きなしるしを送り、これが「真理の霊」としての私の顕現のために予言された時であることを感じ、信じるようになるのを、まさか待っているというのか。ああ、信仰の薄い人々よ！弟子たちよ、今こそ、あなたがたは、なぜ私が時折、「私の声が荒野で叫んでいるが、それを聞き、真に耳を傾ける者は誰もいない」と言うのかを理解するだろう。(93, 27-28)

53. 地上のすべての人々がこのメッセージの真理を信じることができるよう、私は、私の再臨を告げる預言、すなわち古くから預言されていたしるしが、全世界で感じられるようにした。

54. それゆえ、この良き知らせが諸国民に届くとき、人々は、この時代に彼らに語られたすべてのことを探求し、吟味するであろう。そして、驚きと喜びをもって、私の再臨に関して予告され、約束されたすべてのことが、ただ一つの意志、一つの言葉、一つの律法のみを持つ御方にふさわしく、忠実に成就したことを発見するであろう。(251, 49)

55. 「第二の時代」*において、私は使徒たちに私の新しい啓示を告げた。そして彼らが、その時代を告げるしるしは何かと尋ねたとき、私はそれらをつ

ひとつ告げ、また彼らに与える証拠についても告げた。

* 救いの歴史は、キリストによって3つの大きな区分、すなわち時代、あるいは「時」に分けられており、「第二の時代」とは、イエスによる神の啓示の時代およびその後の時代を指す（詳細は第38章を参照）。

56. 前兆は最後の一つに至るまで現れ、これこそがイエスが予言した時であることを告げていた。さて、私はあなた方に問う。もし私があなた方に分かち合っているこの霊的な啓示が真実でなかったなら——なぜ、しるしが現れたにもかかわらず、キリストは（信者たちが期待していた姿で）現れなかったのだろうか？ それとも、誘惑者が、あなた方を欺くために、全被造物や自然の力までも支配しているとお考えなのか。

57. かつて私は、あなたがたが偽預言者、偽キリスト、偽の救い主たちの誘惑に陥らないよう警告した。しかし今日、私はこう告げる。受肉した魂は、その発展、認識、経験によってすでに目覚め、たとえどれほど多くの欺瞞が用意されていようとも、闇を光として提示することは容易ではないほどになっているのだ。

58. それゆえ、私はあなたがたにこう言ったのだ。「盲信してこの道に身を委ねる前に、いくらでも確かめよ！」と。この言

葉はすべての人々——に与えられたものであり、私がその一部を特定の人々のためにだけ留保したことは決してないことを悟れ。この著作の中に、私があなたがたから何か教えを隠そうとしているような書物は一つもないことを見よ。

59. しかし、あの「第二の時代」において、私は使徒ヨハネの口を通して、こうも言った。「もし誰かが私の声を聞いて戸を開くなら、私はその人のところに入り、彼と共に食事を分かち合い、彼も私と共に食事をするであろう。」同様に、私はあなたがたに十人の乙女のたとえを教えた。それは、あなたがたがこの時代にそれを心に留めるためである。（63, 79-80）

60. 前兆や試練がすでに訪れ、私が会堂にも、いかなる教会にも現れなかったのだから——私が自分の言葉に背くことはできないのだから、今まさにどこかの場所で現れなければならないことを、世の人々は察しないのか。（81, 41）

第2章 - 第三の時代の夜明け

最初の啓示

1. 今日とは記念すべき日である。今日のような日に、私は最初の伝達者たちを任命し、彼らを通

して私の新たな教えと啓示を告げ知らせた。エリヤの霊がロケ・ロハス*を照らし、神の律法である道をあなたがたに思い起こさせた。

* この最初の伝達者の名は「ロケ・ロハス」と発音される。

2. その瞬間は厳粛であり、出席者たちの魂は畏怖と歓喜に震えた。それは、シナイ山で律法が宣告された時にイスラエルの民の心が震えたのと同様であり、タボル山でイエスの変容を目撃した弟子たちが、モーセとエリヤが霊的に師の右と左に現れた時に震えたのと同様であった。

3. 1866年9月1日、それは新しい時代の誕生であり、新しい日の夜明けであった。人類のために幕を開けた「第三の時代」である。

4. その時から、神が数千年にわたり人々に与えてきた多くの預言と約束が、絶え間なく成就し続けている。今この時代にこの世に生きる、あなた方、男女の皆さん、それらはあなた方の前で成就したのです。あの預言が語られ、あの約束がなされた時、あなた方のうち、いったい誰が地上にいたのでしょうか？それを知っているのは私だけですが、重要なのは、私があなた方に約束したこと、そして今、それを成就させているということを、あなた方が知っているということです。

5. 私が最後に弟子たちに現れた時、彼らが私を昇天するのを見たあの「雲」について、あなたがたは知っているか。なぜなら、私が「雲の上」から戻ってくると書かれているのは真実であり、私はそれをに成就させたからである。1866年9月1日、私の霊は象徴的な雲に乗って、あなたがたが新しい教えを受け入れる準備を整えるためにやって来た。その後、1884年に、私はあなたがたに教えを与え始めた。

6. 私は人間としてではなく、光の束に封じ込められた霊的な姿で来た。それは、人間の知性の上にその光を留まらせるためである。これが、この時代にあなた方に語りかけるために私の意志によって選ばれた手段であり、私は、この言葉に対するあなた方の信仰を、あなた方の功績として認めるであろう。

7. なぜなら、荒野を通して約束の地へとあなた方を導くのはモーセではなく、また、救いと自由への道として命の言葉を聞かせるのは、人間としてのキリストでもないからだ。今、あなたがたの耳に届くのは、これらの被造物の人間としての声であり、私がそこに臨在する神聖な本質を見出すためには、霊的な境地に入ることが求められる。それゆえ、私はあなたがたに告げる。この言葉は不完全な存在たちを通して与えられているのだから、あなたがたがこれを信

じることは称賛に値するのだ。
(236, 46-50)

8. 1866年、この業の弟子たちである最初のスピリチュアリストの共同体が誕生した。私の霊の光の下で、またエリヤの教えを受け、それらの最初の弟子たちは、今やあなたがたが、その完結を目前にして豊かに受け取っているメッセージの光線を受け取り始めたのである。(255, 10)

世界中のメッセージと示唆

9. 主の道を整えるために最初に現れねばならなかったエリヤは、1866年に初めて人間の知性を通じてその存在を明らかにした。その啓示の時期と一致して、あらゆる分野で起こった兆候や出来事を調査するために、少し時間を割いてみてはどうか。再び、星を研究する学者たち、すなわち古代において魔術師と呼ばれた者たちが、天が神の呼びかけであるしるしを与えたことを証言するであろう。(63, 81)

10. この言葉を聞くこの地の地点が、私がわが子たちの前に現れる唯一の場所だなどと考えるはならない。まことに、私はあなたがたに告げる。私の啓示は様々な形で世界中に及んでいるのだ。

11. 人間の知性を通じて私の啓示の先駆者としてあなたがたの中に現れたエリヤは、あなたがたが住むこの国だけにやってき

たのではない。彼は地球上の場所から場所へと巡り、新しい時代の到来を告げ、天の国の到来を宣べ伝えた。

12. あらゆる方面から、私の到来を告げる叫び声が上がった。揺さぶられた自然は大地を動かし、科学は新たな啓示に驚嘆し、霊界*は人々に迫った。それにもかかわらず、人類は、新時代の先駆者たるそれらの叫びに対して、耳を貸そうとしなかった。

。 * この表現は、より高い来世の次元に住む者たち、すなわち神の霊界の光の霊たちを指す。

13. 人々を闇から救い出すために、神の光の洪水が降り注いだ。しかし、人間たちは——利己的で物質主義的*であり、魂の完成や、地上の生活における道徳的向上を追求することからは程遠い存在であった——その光を、ただ自らのための王座や栄光、肉体の安楽や快樂、そして必要とあれば、同胞の命を奪うための武器を作り出すためにのみ用いた。彼らの目は、わが光の輝きに眩まされ、その虚栄心が彼らを破滅へと導いた。しかし、私はあなたがたに告げる。まさにこの光によって、彼らは真理を見出し、道を発見し、救われるのである。

* これは「霊的」の対義語であり、つまり、物質的・肉体的なもののみに関わる人間の生活や思考を指す。

14. この光をその知性の中に受け入れることができ、それを神からのメッセージとして受け入れた者たちは、良心に自らの歩みを導かせ、その良心を自らの行いの指針とした。なぜなら、彼らは主が再び来られ、人々の間にいらっしゃるという予感を持っていたからである。

15. 様々な宗派や教派の代表者たちは、わたしを受け入れようとはしなかった。彼らの心、尊厳、そして偽りの高慢さが、霊的にわたしを受け入れることを妨げたのである。それゆえ、新時代の到来を感じ取り、祈り、主の靈感を受けるために孤独を求める者たちのグループ、兄弟団、そして団体が、全世界に形成されたのである。(37, 76-81)

16. 私の再臨に備えようと努めている宗教団体があるが、彼らは私がすでに去ろうとしていることを知らない。

17. 私はすべての人を呼びかけた。そして実のところ、私の呼びかけと、私が今まさに人々に現れているという噂は、私を証しする証言や証拠——改心した罪人、回心した不信仰者、よみがえる「死者」、癒される不治の病者、そして悪霊から解放される憑依者たち——と共に、地球の隅々まで届いた。

18. しかし、私は多くの者が耳を貸さないのを見出した。また、この世の地位に驕る者もいれ

ば、私の啓示を「真理の霊」として広めるにはあまりにも臆病な者もいた。私は、私のもとに来て、私の愛を信頼したすべての人を受け入れ、教えを授けた。(239, 17-19)

19. 他の国々から、この民のもとへ大勢の人々がやって来るだろう。彼らは、あなたがたがこの時期に立ち会った霊的な出来事について、また、私があなたがたに与えた啓示や預言について、熱心に尋ねてくるであろう。

20. なぜなら、世界の多くの地域で、私の神聖な光線が西のある一地点に降りてきて、この時代の人々に語りかけるといふ私のメッセージが受け取られているからである。

21. 時が来れば、あなたがたは、他の民族や国々から人々が訪ねて来るのを目にするだろう。その時、主要な宗派の人々は、私が向かった相手が自分たちではなかったことに衝撃を受けるだろう。(276, 45)

22. 世の人々は、私の新たな顕現にどれほど無関心なことか！目を覚まして私を待ち望む者はいかに少なく、眠り込んでいる者はいかに多いことか！

23. 私を待ち望んで生きる者たちについて言えば、この時代に私の臨在がどのような形をとるか、その実態をすべての人々が予感しているわけではない、とあなたに告げよう。なぜなら、古い信仰観の影響下にある者た

ちは、私が人間としてこの世に戻ると考えている一方で、他の者たちは、私が人間の目に見える何らかの姿で現れなければならないと信じているからだ。そして、真実を察し、私の到来が霊的なものであると予感している者は、ごくわずかである。

24. ある者たちが、私がどのような姿をとるか、いつ、どの日に地上に現れるか、またどの場所に現れるかを問う一方で、特定の姿や時期を考えずに、「師はすでに私たちの間におられ、その霊である光が私たちを包み込んでいる」と言う者たちもいる。

25. このメッセージがすべての人の心に届いたとき、ある人々にとっては歓喜の瞬間となるだろう。なぜなら、彼らはこのメッセージの中に、自らの予感と信仰のすべてが裏付けられているのを見出すからである。一方、他の人々は、このメッセージが、自分たちが起こると思っていたことや、それが現れる方法と一致しないため、その真実性を否定するだろう。(279, 41-44)

主の先駆者としてのエリヤの働き

26. わたしは「第三の時代」*にエリヤを帰還させた。そして、主として、わたしはあの「第二の時代」に彼を予告し、こう言った。「まことに、エリヤは

あなたがたの中にいたが、あなたがたは彼を認識しなかった。わたしは世に戻るが、まことに、あなたがたに言う。わたしの前にエリヤが現れるであろう。」

* 第38章を参照。

27. 師の御言葉はすべて成就するものであるから、エリヤは「第三の時代」において、私の前に来て、魂たちを目覚めさせ、聖霊の時代が扉を開いたことを彼らに予感させ、すべての魂に、目を開き、第二の時代から第三の時代へと閾を越える準備をするよう告げたのである。この「第三の時代」において、エリヤの啓示 がより理解しやすいものとなるよう、私は彼を、ある義人、すなわちロケ・ロハスを通じて現れさせた。

28. エリヤはあの世から霊的にこの男を啓発し、彼に靈感を与え、彼を強め、初めから終わりまで、彼の歩むすべての道を導いた。

29. しかし、まことに、私はあなたがたに告げる。彼が人間の中からロケ・ロハスを選んだのではない。私が彼を選び、私の慈悲によって整えられたその魂を遣わしたのである。私は彼に、同じく私によって整えられた肉体を授けた。そして、あなたがたも知っている通り、彼は謙虚であり、その謙虚さと徳によって、父は偉大な業を成し遂げた。彼は預言者であり、代弁者

であり、予言者であり、導き手であった。これらすべてにおいて、彼は民に輝かしい模範を残した。

30. 彼は、モーセが荒野でそうであったように、自らの民から嘲笑され、侮られた。預言者エリヤのように迫害され、民のために祈り、彼らを擁護するために、山々の頂上に身を隠さなければならなかった。

31. 彼は師と同様に、祭司や律法学者たちから嘲笑され、非難された。師と同様に、彼を信じ、従い、彼を取り囲んだのはごくわずかな人々だけだった。彼の手からは癒しの力が溢れ出し、奇跡を起こしたが、それはある者には信仰を呼び起こし、またある者には混乱をもたらした。ある人々にとっては、彼の口から発せられた預言の言葉は、文字通りその通りに成就した。彼の口は、病んだ心に満ちた慰めの助言を与えた。32. 彼の精神は偉大な靈感を受け入れることができ、義人、使徒、預言者たちのように恍惚状態に陥ることができた。彼の霊は、この世と肉体から解き放たれ、霊界へと入り、主の秘宝庫の扉へと謙虚に近づくことができた。この昇華によって、主の光が降り注ぐ前に、エリヤの霊は最初の証人たちにその姿を現した。(345, 57-58)

33. ロケ・ロハスは、信仰と善意に満ちた男女のグループを集めた。そして、その最初の集会

の場において、エリヤは使者の知性を通して自らを顕現し、こう語った。「私は預言者エリヤである。タボル山で変容した者である。」彼は最初の弟子たちに最初の教えを与え、同時に霊化の時代を告げ、まもなく神の師の光が降りてきて、その民に語りかけると預言した。

34. ある日、ロケ・ロハスの質素な集会所が、この男の言葉を信じる信者たちで満ち溢れていた時、エリヤは使者の精神を啓発するために降りてきて、私から靈感を受けて、七つの封印を体現し、あるいは象徴することとなる七人の信者に油を注いだ。

35. その後、私の啓示が約束された時が来たとき、私は、その七人の選ばれた者たちのうち、ただ一人だけが、清き花婿の到来を待ち望んで見張っていたことを知った。その心は、処女ダミアナ・オビエドのものであり、彼女の精神は、その粘り強さと準備への報いとして、神の光の輝きを最初に受け取ることを許されたのである。

36. ダミアナ・オビエドは第六の封印*を体現していた。これは、第六の封印の光こそが、この時代を照らすものであるというさらなる証拠であった。(1, 6-9)

* ヨハネの黙示録に由来するこの用語は、「七つの封印」のうちの最後から二つ目を指し、こ

れらは救いの歴史における3つの時代の中にある7つの時代を象徴するものとして理解される（詳細は第38章を参照）。

37. 神の使者の臨在を真に感じることができた者は、ごくわずかであった。彼は再び、荒野で叫ぶ声となり、人々の心を、間もなく訪れる主の到来に向けて整えた。こうして第六の封印が解かれ、その中身が明らかにされ、正義と光の川となって人類の上に注がれた。このようにして、多くの約束と預言が成就したのである。

38. エリヤは、イエスやモーセと同様に、あなたがたが父を見るようにと、あなたがたの霊の目を照らした。モーセはあなたがたに「隣人を自分自身のように愛せよ」と教えた。イエスはあなたがたに「互いに愛し合いなさい」と言われた。エリヤはあなたがたに、隣人に対してますます深い憐れみを持つよう命じ、すぐにこう付け加えた。「そうすれば、あなたがたは、そのすべての栄光のうちに、わたしの父を見るであろう。」（81, 36-37）

39. 人類を包む闇が消え去り、魂の中に光が差すとき、人々は新しい時代の到来を感じるだろう。それは、エリヤが人々の元に戻ってきたからである。

40. しかし、人々は彼を見ることはできなかったのも、彼の霊が人間の理解力を通じて現れ、

預言者エリヤのあの象徴、すなわち雲の上の炎の戦車に乗って、預言者たちのもとに姿を現す必要があった。

41. エリヤはこの時代、私の到来に備える先駆者としてやって来た。彼は預言者として、その闘いや試練、そして啓示の知恵を伴った新しい時代を、あなた方に告げるために来たのである。彼はその光の乗り物に乗ってやって来て、あなたがたをその乗り物に乗るよう招き、雲の上へと運び上げ、平和が支配する霊的な故郷へと連れて行くのだ。善き羊飼いである彼を信頼し、「最初の時代」に民がモーセに従ったように、霊的に彼に従いなさい。あなたがたが使命を果たす際に彼が助けてくれるよう祈りなさい。そして、もし彼に倣いたいと思うなら、そうしなさい。（31, 58-59）

42. 人類には認識されなかった大いなる力を持つ霊、エリヤは、常に私の先駆者であった。今日、彼は再びやって来て、私の代弁者として仕えてきた「印された者たち」*、そしてすべての人々を準備させている。

* 「印された者たち」（スペイン語：marcados）あるいは「封印された者たち」（ヨハネの黙示録第14章1-5節）とは、キリストに選ばれ、その顔に神の三位一体の印を受けた者たちである。（詳細については第39章の最後の節を参照のこと）

43. もしあなたがたが準備を整え、私の意志を知るために私の教えを学べば、エリヤが助けに来て、あなたがたの支えとなり、友となるだろう。

44. エリヤは、すべての存在を照らし、導き、わたしのもとへと導く神聖な光線である。彼を愛し、あなたがたの先駆者であり、執り成し手として崇めよ。

(53、42-44)

45. 「第三の時代」の先駆者であり、その前触れである預言者エリヤは、その群れのために執り成し、祈ることを知らない者たちのために祈り、罪人の汚点をその外套で覆い隠し、その再生を願っている。エリヤは、無知、罪、狂信、そして人類の物質主義によって生じた闇と戦うために、その群れ、その軍勢を整えている。(67, 60)

46. 今や、すでに備えられ、目覚めたすべての者の任務は、世界の解放を告げ知らせることである。この時代に約束されたエリヤが、かつてモーセがエジプトでイスラエルの部族たちに対して行ったように、物質主義に奴隷とされた地上の諸国をファラオの支配から救い出すために、現在すべてを準備していることを思い起こせ。

47. 同胞たちに、エリヤはすでに人間の知性を通じて現れ、その存在は霊的なものであり、すべての民族が進むことができるよう、今後も彼らの道を照らし続けると伝えなさい。

48. あなたがたの羊飼いの使命は、すべての被造物を、それが霊的、道徳的、あるいは物質的な領域に属するものであれ、その真の道へと立ち返らせることである。それゆえ、私はあなたがたに告げる。エリヤを通して主の呼びかけを受ける国々は祝福されるであろう。なぜなら、彼らは正義と愛の法によって結ばれ続け、その理解と兄弟愛の果実として平和をもたらされるからである。このように結ばれた彼らは、戦場へと導かれ、そこで墮落、物質主義、そして虚偽と戦うことになる。

49. この戦いにおいて、現代の人々は新たな奇跡を目の当たりにし、不死と平和を語る、人生の霊的な意味を悟ることになる。彼らは互いに殺し合うことをやめるだろう。なぜなら、彼らが滅ぼさなければならないのは、彼らの無知、利己心、そして物質的にも精神的にも彼らの没落と苦難を生み出した破滅的な情熱であることに気づくからである。(160, 34-36)

50. エリヤは神の光線であり、その光をもって彼はあなた方の闇を追ひ払い、罪の時代であるこの時代の束縛からあなた方を解放し、あなた方の魂を、神の懷にある「約束の地」に到達するまで、荒野を導いていくであろう。(236, 68)

第3章 - キリストの再臨と いう霊的な太陽

主の到来

1. 私は、新たな発見が人々の生活を一変させたこの時代に、人類の中に臨在している。そして、かつてあなたがたが私に対して抱いていたのと同じ謙虚さをもって、あなたがたの間での私の臨在を感じさせている。

2. 神の「御言葉」が再び人となったわけではなく、キリストが再び馬小屋の貧しさの中で生まれたわけでもない——いいえ、もはや、神の力を証しするために肉体が必要ではないからだ。もし人々が、この肉体がこの世に降臨した神であると考えているなら、それは誤りである。神の臨在は霊的であり、普遍的であり、無限である。

3. もし、この時代に人々が成し遂げたすべてが、正義と許容と善の範囲内にあるのであれば、私が再び下って来て、あなた方に語りかける必要はなかっただろう。しかし、この人類が私に捧げるすべての行いが善であるわけではない。多くの過ち、多くの不正、多くの逸脱、そして多くの悪行がある。それゆえ、人間が自らの行いに最も深く没頭している時に、私の慈愛が人間を目覚めさせ、彼がどのような義務を忘れていたか、そ

して今あるもの、そしてこれからあるべきものすべてを誰に負っているのかを思い出させる必要があったのだ。

4. 霊から霊へと私を聞き取ることができなかった、物質化してしまった人類に、私の声を届けるためには、私は彼らの霊的な賜物と能力を用い、人間の知性を通じて自らを明らかにしなければならなかった。

5. 私が「降りてきて」あなた方に語りかける理由の説明は、次の通りである。あなた方は、主と霊から霊へと対話するために自ら高みへ昇ることができなかったため、私は一段階下へ降りなければならなかった。すなわち、あなた方がまだ到達できない霊的な領域、神聖な領域からである。そこで私は、人間の脳内に位置する知性という器官を用い、私の神聖な靈感（インスピレーション）を人間の言葉や物質的な音へと変換せざるを得なかった。

6. 人間にはより広範な知識が必要であり、神こそが人間のもとに来て、知恵を託すのである。もし、選ばれたが、これらの代弁者の理性の器官を通じて行われる私の短い啓示の手段として、あなた方にふさわしくないとと思われるならば、私は真実を告げよう。彼らを通じて与えられるメッセージは、実に偉大なものである。あなたがたは

、私の啓示が、人々に印象を与えるような華やかで儀式的な形で行われることを望んだかもしれない。しかし、実際には、霊的な観点から見れば、それらは真の光を含んでいないため、虚しいものだっただろう。

7. 私は、自分の力をはっきりと示すために、稲妻や嵐を伴って現れることもできた。しかし、そうなれば、人々が「主の御臨在が訪れた」と認めるのは、どれほど容易なことだっただろうか！しかし、その場合、恐怖が再びあなた方の心に立ちこめ、理解を超えた何かという概念も戻ってきたのではないだろうか？ 父への愛の感情はすべて、ただその正義への恐れへと変わってしまっていたのではないだろうか？ しかし、あなたがたは知っておくべきだ。神は全能の力であるにもかかわらず、その力によってあなたがたを打ち負かすことはなく、それによって支配しようとはしない。むしろ、別の力、すなわち愛の力によってそうするのだ。

8. 今日、宇宙に語りかけているのは神聖な御霊である。かつてあなたがたがはっきりと認識できなかったすべての事柄に光をもたらすのは、まさに御霊である。御霊はすべての人々にとって新たな日の夜明けである。なぜなら、御霊はあなたがたを誤った恐れから解放し、疑念を

取り除き、あなたがたの魂と精神を自由にするからである。

9. 私はあなたに告げる。私の教えの本質と、私の法の正義を知った後、あなたは、自らの観念が課してきた限界、そしてそれが、真実に対するわずかな認識を超えることを妨げてきたことを、認識するようになるだろう。

10. もはや、探求し、発見することを妨げるのは、罰への恐れや恐怖ではない。あなたがたが、自分にとって理解不能なものを真に知りたがるときのみ、良心がその道を禁じるだろう。なぜなら、人間には全真理が与えられるわけではなく、自分にふさわしい部分のみを把握すべきであることを、あなたがたは知るべきだからである。

11. 人々よ。もし私の到来が、戦争や解き放たれた自然の猛威、疫病、そして混沌の只中にあると予告されていたとしても、それは私がこれらすべてをもたらしたからではない。それは、まさにその危機の瞬間に、私の存在が人類にとって助けとなるからである。

12. さて、ここに、私の再臨について語られてきたすべてのことが成就する。世界が死と格闘し、地球が死のうめき声とともに震え、身悶えしながら、新しい人類への道を切り開こうとしているまさにその時、私は

人々のもとへやって来る。それゆえ、「第三の時代」における神の呼びかけは、正義、兄弟愛、そして平和をその内に宿し、それらを鼓舞する愛の呼びかけなのである。

13. かつてキリストの言葉は弟子たちの内に芽生え、彼らに従う民の中でその種は成長した。その教えは広まり、その真意は全世界に及んだ。同様に、今日のこの教えもまた広まり、それを感じ取り、理解する能力を持つすべての人々によって受け入れられるであろう。(296, 17-27, 35)

すべての目がわたしを見るだろう

14. イエスは弟子たちにこう言われた。「わたしは、あなたがたからほんの少しの間離れるだけだ——また戻ってくる。」その後、彼らの師が天使たちに囲まれ、「雲の上」からやって来て、光線を地上に降り注ぐことが彼らに啓示された。

15. 今、私はここに「雲の上」にいます。私を取り囲む天使たちは、あなたがたの間で、私の神性の使者として、またあなたがたの良き助言者として現れた霊的な存在たちです。その光の輝きは、あなたがたに新たな啓示をもたらし、あらゆる知性を知恵で満たす、私の言葉なのです。

16. 見ることなく信じた者たちは幸いである。彼らは、私の臨在を感じる者たちだからである。(142, 50-52)

17. 人はその霊によって真理を発見し、すべての人が私の臨在を感じるであろう。なぜなら、その時が来れば、すべての目が私を見るようになる、と私はかつてすでにあなた方に告げていたからである。

18. さて、あなたがたが生きているこの時代は、まさに、私の言葉と過去の時代の預言者たちによって予告された、すべての人々がその霊の感覚と能力によって私を見るようになる時代である。

19. 彼らが私を見たと言えるために、私を人間の姿という限定された形で見する必要はない。むしろ、彼らの霊が私を感じ、彼らの理性が私を理解すれば、彼らが私を見たのだと、完全に真実をもって言えるようになるのである。

20. 愛と信仰、そして知性は、あなたがたの目ができるよりもはるかに遠くまで見通すことができる。それゆえ、あなたがたに告げる。あなたがたにわたしを見させるために、わたしが自分の存在を人間の姿に限定したり、あるいは何らかの象徴的な姿にしたりする必要はないのだ。

21. あの「第二の時代」に私を見たり、私と共に歩んだりした人々のうち、どれほど多くの者が、私が誰であるかさえ知らなかったことか。それに対して、私が人間として生まれたことさえ知らなかった人々のうち、どれほど多くの者が、霊の中で私を仰ぎ、私の光によって私を認識し、その信仰ゆえに私の臨在を喜びとしたことか。

22. あなたがたは皆、目を開き、信仰によって、あなたがたが光の子であることを証明しなさい。あなたがたは皆、わたしを見ることができるが、そのためには、善意と信仰を持つことが不可欠である。(340, 45-51)

23. わたしはあなたがたに言う。もしこの人類が、愛の欠如、正義と善からの背きによって、さらにわたしに敵対するならば、わたしはサウロの前に現れたように、彼らの道に栄光に満ちて現れ、彼らにわたしの声を聞かせるであろう。

24. そうすれば、あなたがたは、知らず知らずのうちにわたしを迫害していた者たちの多くが、変容し、啓発されて、善と愛と正義の道を歩むわたしの後を追うようになるのを目にするだろう。

25. 私は彼らにこう言うだろう。「立ち止まれ、旅人たちよ。この水晶のように澄んだ水の

泉から飲みなさい。私があなたたちに課した過酷な人生の旅路から、休息をとれ。あなたの悩みを私に委ね、私の視線があなたの魂の奥深くまで入り込むことを許しなさい。私はあなたたちを恵みで満たし、慰めたいのだから。」(82, 46)

26. わたしの愛は、あなたがたの心の最も繊細な琴線に震えを走らせるだろう。しかし、あなたがたにこの神聖な協奏曲を聴かせるのは、あなたがたの良心との調和によるものであり、あなたがたの多くは、イエスの霊的な姿の中にわたしを見るだろう。

27. イエスの姿こそが、あなたがたが私を見る最も完全な形ではないことを、私は指摘しておかなければならない。かつて私が「すべての目が私を見る」と語ったとき、私はあなたがた全員が真理を悟ることを示唆していた。とはいえ、私は各人の魂の成長段階に応じて、自らを制限せざるを得ないことを伝えなければならぬ。しかし、あなたがたが完全性への階段を登っていくにつれ、確かに私のすべての栄光の中にある私を見るようになるだろう。

28. 今、いかなる形でも私を想像しようと試みてはならない。考えてみよ。あなたがたの霊は、たとえ限られているとはいえ、本質であり、光である。そ

れならば、始まりも終わりもない（ ）あなたがたの主の普遍的な霊は、いったいどのような姿をしているというのか。その測り知れない神秘は、私の『神の知恵の書』の中に留めておきなさい。（314, 69-70）

29. 私の「第二の時代」の御言葉において、私は再びあなたがたのところへ来ること、私の霊的な軍勢が私と共に降りてくることを知らせた。しかし、人類は私の御言葉の意味を正しく理解せず、解釈も誤った。

30. それゆえ、あらゆる宗教団体が自分たちの真ん中で私を待ち望み、この世の目で見えることを期待している。しかし、今このように私を待ち望んでいる者たちは、かつてイエスがメシアであることを否定し、彼を夢想家だと見なした者たちと同じである。

31. 今日、私はあなたがた、私の弟子たちに告げる。あなたがたが私の全き栄光の中にある私を見る時が来る。その時、地球とその住人は清められ、魂の美德と美しさが回復される。苦しみは消え去り、すべてが至福となり、あなた方にとって終わりのない、無限の「日」となるだろう。あなた方は、この奇跡を見たいと思わないのか。あなた方の子供たちが、私の霊と対話し、罪から解放されて平和な世界を築けるようになること

を望まないのか。（181, 74, 81）

32. もし人類が「第一の時代」と「第二の時代」の預言を深く理解していたならば、それらの預言が実現したとしても、混乱することはなかっただろう。

「第二の時代」にメシアが人々の間に生まれた時にも同じことが起こったが、今、私が霊として来られた時にも、まさに同じことが起きている。

33. 私の教えの真意は、どちらの時代においても同じである。それは、あなたがたがこの世を、たとえ儚いものであっても、愛に満ちた住まいとするよう備えさせるためのものであり、そこでは人々が互いを兄弟姉妹と見なし、そう接し、真の兄弟愛の温もりを互いに分かち合うのである。

34. また、この人生の後、主が御子らのために用意しておられるあの世界、あるいは住処へと入るために、魂を準備しなさい。私の願いは、あなたがたがそこにたどり着いたとき、見知らぬ場所だと感じるのではなく、霊性化と内なる知恵によって、出会うすべてのものを、あたかも以前にもそこにいたかのように見ることができるようになることです。もしあなたがたが、すでにここで祈りを通じて霊的なものとつながっているな

らば、そこには多くの真実があるでしょう。(82, 9-10)

35. 私は、あなたがたの心の扉を叩く旅人である。私は叩くが、あなたがたはそれが誰なのか分からない。あなたがたは扉を開けるが、私を認識しない。私は、村にやって来て、自分を誰一人として知らない旅人のようであり、異国の地に入り、その言葉では理解されない()外国人のようだ。私は、あなたがたの中でそのように感じている。いつになったら、あなたがたは私の存在を感じるだろうか。おお、人々よ、いつになったら、かつてエジプトでヨセフが兄弟たちに認められたように、あなたがたは私を認めるだろうか。(90, 1)

第4章 - 神の啓示による教え

啓示の源

1. 常に神の中にあり、キリストの中にあり、今日あなたがたが聖霊によって知っている「言葉」が、あなたがたに語りかけている。なぜなら、「言葉」とは、言葉であり、律法であり、メッセージであり、啓示であり、知恵だからである。もしあなたがたがキリストの言葉を通して「言葉」を聞き、今や聖霊の霊

感によってそれを受け取っているならば——まことに、わたしはあなたがたに言う、あなたがたが聞いたのは神の声である。なぜなら、神はただひとり、言葉はただ一つ、聖霊はただひとりだからである。(13, 19)

2. 声の担い手の唇を通して語られる言葉の中に宿る、その光の源が何であるか、あなたがたは知っているか。その源は、善、神の愛、神から発せられる普遍の光にある。それは、あなた方に命を与えるあの全光の一筋の光、あるいは一粒の火花であり、万物を動かし、万物を振動させ、脈動させ、絶え間なくその軌道を描かせる無限の力の一部である。それは、あなたがたが「神聖な輝き」と呼ぶものであり、魂を照らし、生かす神聖な霊の光である。(329, 42)

3. 今この瞬間、常にあなた方の救いのために来られた方が、あなた方に語りかけている。キリスト、すなわち神の約束であり、「第二の時代」にイエスとして人となった、神の言葉が人の言葉となったもの。愛と光と知恵の霊であり、一筋の光線の中に封じ込められ、その光線は人間の精神、魂、そして理性を包み込み、私の考えを伝えるよう彼を導くのである。(90, 33)

4. 私は、この世において迫害され、冒瀆され、被告とされたキリストである。「第二の時代」において、あなたがたがイエ

スを通して私にしたすべてのことを経て、私はあなたがたの元へやって来る。それは、私があなたがたを赦し、愛していることを、もう一度証明するためである。

5. あなたがたは私を裸のまま十字架につけたが、私もまた同じようにあなたがたのところに戻ってくる。なぜなら、私は偽善や嘘という衣の背後で、私の霊と真理をあなたがたの目から隠したりはしないからだ。しかし、あなたがたが私を認識できるようにするためには、まずあなたがたは自分の心を清めなければならない。(29, 27-28)

6. 今日、私はあなたがたに言う。ここに師がいる——人々がガリラヤのラビと呼んだその人だ。私は、永遠に通用する教え、すなわち愛の教えをあなたがたに与える。今日私があなたがたを招く祝宴は霊的なものであり、パンも ワインもまた同様である。しかし、今日、かつてのように、そしていつの時代も変わらず、私は道であり、真理であり、命である。(68, 33)

啓示の場所と啓示の受け手

7. 私が父の「言葉」であることを、また、あなたがたがこの言葉の中で受け取る神聖な本質は、この創造主の霊からの光であることを、そして、私があなたがた一人ひとりの内に私の霊の一部を残したことを、覚えておきなさい。

8. しかし、今まさに私の言葉に耳を傾けている群衆を取り巻く貧しさや、あなたがたが集まっているこの場所の質素を見ると、あなたがたは心の中で私にこう問いかける。「師よ、なぜこの時代に、あなたにふさわしい豪華な祭壇や厳粛な儀式が捧げられるような、あの大きな神殿や大聖堂を、あなたの啓示の場として選ばなかったのですか？」

9. 師についてこのように考えている人々の心に、私はこう答える。私をこの貧しさへと導いたのは、人間たちではない。私自身が、私の教えを広めるために、あなたがたの町の貧しい郊外にある質素な住まいを選んだのだ。それは、私があなたがたに求めているのは物質的な貢ぎ物や外見の捧げ物ではなく、それとは正反対であることを、あなたがたに理解してもらうためである。私はまさに、あなたがたが謙遜の中に霊性を見出せるよう、改めて謙遜を説くために戻ってきたのだ。(36, 24-25)

10. ある人々は、集会の場所の貧しさや質素さ、そして私が自らを現す声の持ち主たちの目立たなさを理由に、私の存在を信じようとししない。しかし、そのような疑いを持つ人々がキリストの生涯を研究すれば、彼が決して見せびらかしや称賛、あるいは富を求めたことはなかったと気づくはずである。

11. これらの場所は、かつて私が生まれた馬小屋や藁の上のように、貧しく、ささやかなものであってもよい。(226、38-39)

12. 私がこの国を、新たな啓示のために最後の瞬間に選んだなどと思ってはならない。すべては永遠の昔から定められていたのだ。この地、この民族、そしてあなた方の魂は、私が準備してきたものであり、私の臨在の時もまた、私の意志によってあらかじめ定められていたのである。

13. 私は、最も卑しい者たち、すなわち、その知性と魂を清く保ってきた者たちの間で、私の啓示を始めると決めた。その後、私はすべての者が私のもとに来ることを許した。なぜなら、私の食卓には、差別も優遇もないからである。この民に下された私の言葉は、その形式において単純で謙虚であり、あなた方にとって理解しやすいものであったが、その意味内容は極めて明快であり、あなた方の精神にとっては深遠なものであった。なぜなら、私はあらゆる知識の宝庫であるにもかかわらず、常に単純かつ明快に表現し、啓示するからである。私は誰にとっても 謎ではない。その謎や神秘は、あなた方の無知が生み出したものに過ぎない。(87、11-12)

14. 最初に私の言葉に耳を傾けた者たちは、私の業をまるで一

本の木のように扱い、最初の枝を切り取って、それを様々な地域に移植した。ある者は私の教えを正しく解釈したが、ある者は道を誤った。

15. 貧しい集会所の陰に集まったグループは、小さなものでした。しかし、その数が増え、人々の群れが拡大するにつれ、私は彼らに団結を呼びかけた。それは、すべての者が一人の師の弟子であることを自覚し、同じ方法で教えを実践するためであり、また、種が「働き人」*の気まぐれによってではなく、神の御心に従って蒔かれるようにするためであった。

* イエスの「ぶどう畑の労働者」のたとえ話への言及。

16. 新約の霊的な契約の箱の前で、人々の群れは服従、従順、そして善意を誓った。しかし、暴風や竜巻が猛威を振るい、木の枝を激しく打ちつけるようになると、弱気になった者もいれば、揺るぎなく堅固に立ち続け、新しい「働き人」たちに「畑」を耕すよう教えた者もいた。

17. この啓示の偉大さを悟った者の中には、他者より優位に立つための知識と力を手に入れるべく、私の意志を超えて私の奥義に深く入り込もうとした者もいた。しかし、彼らはすぐに私の正義に直面することとなった。

18. また、この業の偉大さを、その純粹さ、その簡素さの中に

発見することができなかった者たちは、私の啓示に厳肅さを与えることができると考え、宗派や教会の儀式、象徴、儀礼を取り入れた。(234, 27-30)

19. この啓示が明らかにされ始めて以来、たとえ不信仰者たちが現れたとしても——知性を鍛えた者たちの中にも、また教養のない者や無知な者たちの中にも——、あなた方の精神は私の教えによって照らされてきた。

20. この啓示を否定しようとする議論はどれほど多かったことか！この言葉を滅ぼそうとする試みはどれほど多かったことか！しかし、何ものも私のメッセージの歩みを止めることはできなかった。それどころか、この働きに反対すればするほど、人々の信仰は燃え上がり、時が経てば経つほど、私が私の言葉を伝える者たちの数は増えていった。

21. ここから何を学ぶべきか。それは、人間の力では、神の力がその御旨を遂行することを決して阻止できないということである。

22. 人々がこれらの集会の場の中で集まったとき、彼らは常に世を恐れることなく、常に私の臨在と保護を信頼してそうしてきた。そして私は、彼らの信仰が真実に基づいていることを彼らに証明した。(329, 28-30, 37)

23. この共同体の中に、私に従うために愛と信仰に満ちた、素

朴で謙虚な心を持つ者たちからなる、新たな使徒の群れが生まれた。もちろん、彼らの間には、私の存在を信じるために目で見なければならぬ新しいトマスも、私を信じていながらも人々の恐れから私を否認してしまう新しいペトロも、そして金と諂い（お世辞）のために私の言葉と真理を売り渡し、私を裏切る新しいイスカリオテのユダも、欠けてはいなかった。

24. この民を構成する群衆は絶えず増え続け、都市、地方、村々に広がっていった。そして、この民の中から、真理と正義の使徒たち、主の教えに熱意を燃やす献身的な働き手たち、そして真実を語る清らかな心を持つ預言者たちが現れた。(213, 72-73)

25. わが新たな啓示において、私はすべてを変えた。すなわち、啓示の場所と手段を変えたのである。それは、わが以前の啓示に対してなされた無知、誤り、そして誤った解釈を排除するためである。太陽が東から昇り、正午には天頂に達し、その後西に沈むのを見るように、私の霊の光も時を経て東から西へと移行した。それは、あなたがたが私の栄光と力を特定の場所や人々、あるいは人種に限定しないためである。(110, 9)

26. 私にとって、ごく少数の者たちが私を聞き取るだけで十分である。なぜなら、彼らは明日、その証しを同胞たちに伝える

からである。もし私がすべての人々を呼び集めたとしても、その大半は、世の務めに追われて来なかつたろうと私は知っている。彼らは私を否定し、善意を持つ人々が私を聞くためにやって来るのを妨げただろう。

27. 私が自らを現す、この取るに足らない場所の静寂の中で、私は私の種を芽吹かせる。私は、素朴な心を持つ者たちを共同体として結びつけ、彼らが物質主義的な生活の喧騒から離れたとき、愛、永遠、霊、そして真の人間的・霊的価値について語りかける。それによって、彼らが感覚ではなく、霊を通して人生を見つめるように導くのである。

28. 私はこれらの子供のような心を弟子と呼ぶ。彼らはかつて何も所有したことがなく、隣人から注目されたこともなかったが、私によって召されたという満足感に満たされ、新しい命へとよみがえった。主が彼らの中に啓示を授け、愛の道を示してくださったゆえに、彼らは隣人の役に立てるという確信と高揚感をもって立ち上がったのである。

29. 彼らがイエスの弟子と名乗るゆえに、彼らを否定し、嘲笑する者もいるかもしれない。しかし、まことに、あなたがたに告げる。たとえ彼らからこの恵みが奪われたとしても、彼らは依然として私の弟子であり続けるのだ。(191, 33-36)

30. 世界は、私の声が彼らを呼ぶのを待っている。人々の心は、たとえ信仰において死んでいても、キリストの声が近づき、「起き上がり、歩め」と告げるのを待ち望んでいる。

31. 「死者」たち、「盲人」たち、病者たち、そして社会から疎外された者たちは、非常に大きな民を成している。わたしは彼らのもとへ行く。なぜなら、霊的にも肉体的にも苦しんでいる者たちは、わたしの臨在を最も受け入れる準備ができているからである。世の権力者たち——権力、富、そして世俗的な栄華を持つ者たちは、私を必要としていないと思い込み、私を待ち望んでいない。彼らはすでにすべてを持っていると言うのだから、キリストが彼らに何を与えられようか？ もしかすると、いくつかの霊的な恵みや、永遠における居場所だろうか？ そんなことは彼らには興味がないのだ！

32. それゆえ、私は、肉体的にも精神的にも貧しく病むこの大群衆を求め、彼らに私の教えを説いたのだ。彼らは私を切望し、私を探し求めていたからである。したがって、私が再び人類の前に現れる時が来たとき、彼らが私の臨在を感じ取ったのは、ごく自然なことであった。(291, 32-34)

神の啓示の伝達

33. 人間の知性によるこの啓示を疑う者は、他の被造物に対する自らの優位性を否定するかのようには振る舞っている。それは、あたかも自らの精神を否定し、無限の試練、苦難、闘争を経て到達した精神的・知的な水準を自覚しようとしなないかのようだ。

34. 私があなたがたの知性や精神を通じて自らを現すことを否定することは、自分自身を否定し、下等な被造物の立場に身を置くことを意味する。

35. 人間が神の子であることを知らない者がいるだろうか。人間が自らの内に魂を宿していることを知らない者がいるだろうか。ならば、父と子との間に、互いに意思疎通を図るための手段が一つあるいは複数存在しなければならぬと、なぜ信じないのか。

36. 私は知性であるゆえに、あなたがたの知性を通じて語りかける。私は霊であるゆえに、あなたがたの霊に語りかける。しかし、私の啓示を否定する者たちが、私を霊として見ようとも、認識しようとしなければ、どうしてこの真理を理解し、受け入れることができようか。彼らは心の中に多くの誤った観念を抱いており、例えば、私が人間の姿をした神聖な存在であり、私とつながるためには象徴や像を通じて私を象徴化しなけ

ればならぬ、といった考えを抱いている。

37. 何世紀にもわたって、このようにわたしを求め続けた人々は、自分たちが祈りを捧げ、儀式を行う像や彫刻の無言さに慣れてしまい、やがて心の中に、「神を見ることも、聞くことも、感じることも、誰にも値しない」という考えが芽生えてしまった。「私は人間に近づくにはあまりにも高遠すぎる」と言うことで、人々は私に敬意を表していると思い込んでいる。しかし、彼らは間違っている。なぜなら、私が人間のような小さな被造物と関わるにはあまりにも偉大すぎると主張する者は、私の霊があなた方に明らかにした最も美しいもの、すなわち謙遜を否定する無知な者だからである。

38. もしあなたがたがキリストを信じ、キリスト教徒であると主張するならば、主があなたがたに近づかれるに値しないなどという、そのような無意味な考えを抱いてはならない。神の「御言葉」が人間となられたという、神の愛の証こそが、まさにあなたがたのキリスト教の信仰の基盤であることを、忘れてしまったのか。魂が曇り、知性が弱い、罪深く肉欲的な人々の理解力に、私が神の声を人間の言葉として聞かせたこと以上に、これほど具体的で人間的な接近があっただろうか。

39. これこそが、人間に対する愛、謙遜、そして憐れみの最大の証であり、私はそれを血をもって確証した。それは、私にとって不適格な者は誰一人としていないことを、あなたがたが常に心に留めておくためである。なぜなら、私は、泥沼や闇、そして悪徳の中に最も深く迷い込んでいた者たちのためにこそ、私の言葉を人間として現し、私の血という命の雫を流したのである。

40. それなのに、これらすべてを信じている者たちが、なぜ今、私の臨在と啓示を否定するのだろうか。なぜ彼らは、神は無限であり、人間はあまりにも低俗で、あまりにも取るに足らず、不適格であるから、これは不可能だと主張しようとするのか。まことに、わたしはあなたがたに言う。この時代にわたしの啓示を否定する者は、あの「第二の時代」におけるこの世でのわたしの臨在をも否定し、わたしの愛と謙遜をも否定しているのだ。

41. 罪人であるあなたがたにとって、自分の罪ゆえに私から遠く離れていると感じることは、ごく自然なことだ。しかし、私にとっては、あなたがたが過ちを犯し、魂を汚せば汚すほど、私があなたがたに寄り添い、光を与え、手を差し伸べ、あなたがたを癒やし、救うことが、ますます必要であると感じている。

42. 私が再び子供たちに現れたとき、多くの者が私を否定するだろうと知っていた。それゆえ、私は当時すでに再臨を予告していた。しかし同時に、その時の私の臨在は霊的なものであることも明らかにしておいた。もしあなたがたがこれを疑うならば、福音書に私の言葉を記したあの四人の弟子たちの証言によって確かめてほしい。

43. 今、私は霊としてここにあり、輝く「雲」からあなた方に私の言葉を送り、これらの伝達者たちを通してそれを人間的な言葉として伝えている。これは、あなた方全員が到達すべきあの啓示、すなわち霊から霊への対話への準備としての教えである。(331, 1-10, 13)

44. 神の御心は、恍惚状態にある私の代弁者たちによって言葉へと移され、それらが文として結ばれることで、啓示と完全な教えに満ちた霊的な教義を形成し、確立した。

45. これこそが約束された慰め主であり、すべてを教え導くであろうと予告された真理の霊である。その準備はすでに始まっており、あなたがたは、その霊に力を持つゆえに、心の気高さと謙虚さ、知恵と慈悲をもってあなたがたを導く者を必要とする時が来る。(54, 51-52)

46. わたしの教えは、あなたがたの知性に光をもたらすために、あなたがたのもとに来る。しかし、この時代にわたしがあな

たがたのもとに来たその方法について、驚いてはならない。それによって混乱してはならないが、それを日常的なものにしてはならない。

47. 私の神聖な光が、私の代弁者として仕えるその人の知性へと至るとき、それは振動へと凝縮され、知恵と愛の言葉へと変容する。私の霊が、この形であなた方の元へ至るために、天の梯子の何段もの階段を降りなければならないことか！また、私の教えについて詳細な説明をあなた方に与えるために、私は私の「霊界」をもあなた方に遣わさなければならなかった。（168, 48）

48. 私が人間の知性という器官を通して自らを現すのは、脳こそが、創造主によって完全に造られた「装置」であり、その中に、魂の光である知性が現れるためである。

49. この「装置」は、あなたがたがどれほど科学を駆使しても決して再現することのできないモデルである。あなたがたはその形と構造を、自らの創造物の手本として用いるだろう。しかし、あなたがたの父の御業が持つ完全さには、決して到達することはできない。それならば、なぜ私が、私が創造したものをを用いることができると疑うのか。（262, 40-41）

50. いつの時代においても、師としての私の愛は、人々に必要な教えに細心の注意を払ってき

た。そして私は常に、彼らの霊的な成熟度と知的な発達に合わせて語りかけるために、彼らのもとを訪れてきた。

51. 私があなた方のところに来たのは、あなた方が作り出した人間の言葉や教えが、あなた方の魂の燃えるような渇き——光への渇き、真理への渇き、永遠と愛への渇き——を満たしていないと見たからである。それゆえ、私はあなたがたの間に身を置き、謙虚で、無知で、教養のない人々を用い、彼らをな知性と魂の恍惚状態に陥らせ、その口から「第三の時代」のメッセージが溢れ出るようにしている。

52. 私の神聖な思念を受け取り、伝えるにふさわしい者となるために、彼らは物質化や世の誘惑と戦わなければならなかった。このようにして自らの個性を抑え、虚栄心を戒めることで、彼らは短い期間のうちに自らの存在を完全に捧げるに至り、その知性の器官を神の靈感に捧げ、こうして彼らの唇から、知恵と優しさ、正義、癒し、そして平和に満ちた言葉が語られることを可能にしたのである。

53. 私の霊がそれらの脳に降りてくることなく、ただ私の光の一筋が彼らを照らすだけで、なぜ声の担い手たちがこれほど多くの知識を言葉で表現し、これほど多くの生命のエッセンスを聞き衆の精神に注ぎ込むことができるのか、理解できない者た